岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第193集

人当Ⅰ遺跡発掘調査報告書

北本内ダム建設工事関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

人当Ⅰ遺跡発掘調査報告書

北本内ダム建設工事関連遺跡発掘調査

序

広大な面積を有する本県には、縄文時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地があり、7,600カ所を越える遺跡の存在が確認されています。これら先人たちが残した文化財を保護し、保存していくことは、県民に課せられた重大な責務であります。一方、広大な面積をもつ本県の大部分は山地であり、快適な生活や豊かな生産基盤を充実させる社会資本の整備も県民の切実な願いであります。このような、埋蔵文化財の保護・保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の、調和のとれた施策が今日的な課題となっています。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の発掘調査を行い、その成果を記録として保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、北本内ダムの建設に関連して、平成3年度に発掘調査を実施した人当Ⅰ遺跡の調査結果を収録したものです。遺跡は北上平野の西端、和賀川扇状地の扇頂部付近にあります。道路部分の調査であったため狭い範囲の調査でしたが、縄文時代の土坑と縄文時代早期や弥生時代の土器が発見され、成果をおさめました。

この報告書が研究者のみならず広く活用され、当地方の歴史と埋蔵文化財に対する理解と保護の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、これまでの発掘調査や報告書作成にご協力とご援助を賜りました北本内ダム建設事務所や北上市教育委員会をはじめとする関係者各位に衷心より感謝申し上げます。

平成5年3月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長　工　藤　　巌

例　言

1．本報告書は、岩手県北上市和賀町仙人９地割88他に所在する人当（ひとあて）Ⅰ遺跡に関わる調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の発掘調査は、北本内ダム建設に伴う工事用道路の拡幅事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会文化課と岩手県土木部北本内ダム建設事務所の協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．岩手県遺跡登録台帳と調査時の遺跡略号は、次のとおりである。

遺跡番号……ＭＥ51－2319　　遺跡略号……ＨＡ－91

4．調査期間・調査面積・調査担当者は、次のとおりである。

平成３年４月16日～５月９日・400㎡・中川重紀、千葉悟

5．室内整理期間と整理担当者は、次のとおりである。

平成３年11月１日～平成４年３月31日、中川重紀

6．石質鑑定は佐藤二郎（佐藤地質工学研究所）に依頼した。

7．発掘調査に伴う諸記録及び出土遺物は、ＨＡ－91の遺跡略号を付して岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

本　　文

序

例言

Ⅰ　調査に至る経過……1

Ⅱ　遺跡の立地と環境……2

　1　位置と立地……2

　2　遺跡の土層……2

　3　周辺の遺跡……5

Ⅲ　調査の方法と室内整理……7

　1　調査の方法……7

　2　室内整理……7

Ⅳ　検出された遺構と遺物……8

　1　土坑……8

　2　遺構外の出土遺物……11

　　1）土器……11

　　2）石器……14

Ⅴ　まとめ……16

図　　版

第1図　岩手県全図と遺跡の位置……1

第2図　基本土層概念図……2

第3図　周辺の地形とグリッド遺構配置図…3

第4図　周辺の遺跡……6

第5図　土坑と出土遺物1……18

第6図　土坑と出土遺物2……19

第7図　方形土坑……20

第8図　遺構外出土遺物土器1……21

第9図　遺構外出土遺物土器2……22

第10図　遺構外出土遺物石器1……23

第11図　遺構外出土遺物石器2……24

第12図　遺構外出土遺物石器3……25

写真図版

写真図版1　遺跡空中写真……29

写真図版2　遺跡近景と基本土層……30

写真図版3　土坑1……31

写真図版4　土坑2……32

写真図版5　土坑内出土遺物……33

写真図版6　遺構外出土土器……34

写真図版7　遺構外出土石器1……35

写真図版8　遺構外出土石器2……36

表

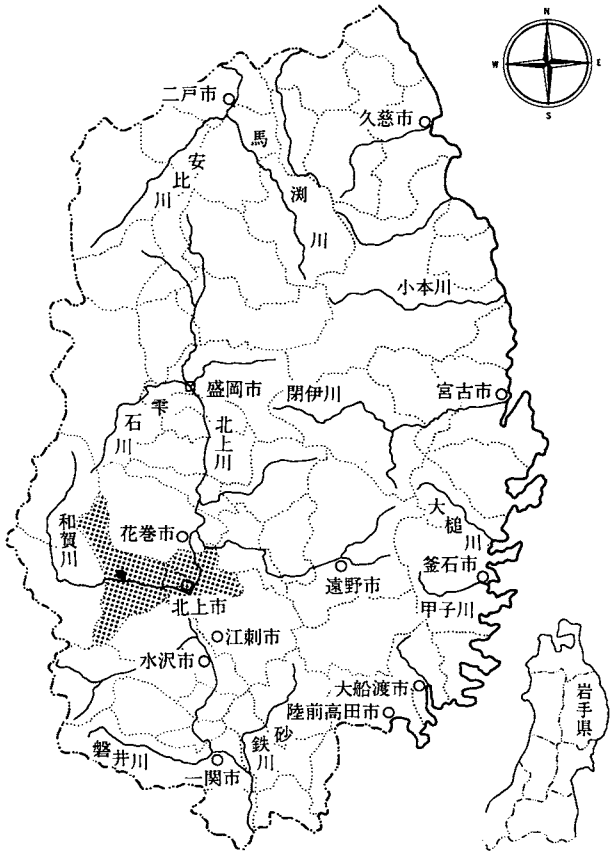
周辺の遺跡表……5

石器計測表……26

Ⅰ　調査に至る経過

北本内ダムは洪水調節、水道水の供給、発電および流水の正常な機能の維持を目的とした多目的ダムとして昭和59年に事業化された。ダムは和賀川支流の北本内川に建設されるものであり、国道107号から分岐する町道人当線を工事用道路として利用する計画である。しかし人当線は線形が不良であり、また狭隘であることから、改良工事をすることとなった。

工事区間に存在する埋蔵文化財包蔵地については、岩手県教育委員会が平成２年に試掘調査を実施しており、その成果をもとに発掘調査の必要性が事業主体である岩手県土木部に伝えられた。その結果、県土木部と教育委員会の調整によって人当遺跡の発掘調査を平成３年度における岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターの受託事業とした。これにより、当埋蔵文化財センターは平成３年４月１日付けの委託契約にもとづいて調査に着手することとなった。



第１図　岩手県全図と遺跡の位置

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　遺跡の位置と立地

人当Ⅰ遺跡は北上市の西方にあり、北上市街地より西へ約16kmの地点、東日本旅客鉄道北上線岩沢駅の北西１km、国道107号線から北に約50m入った地点に位置する。（第３・４図）

本遺跡は東流する和賀川が大きく蛇行する仙人地区にある。遺跡は和賀川扇状地扇頂部付近のため、平坦部が限定された僅かに残る岩沢段丘に立地し、和賀川の北側舌状台地縁辺の丘陵山麓部分にあたる。岩沢段丘は北上川流域の金ケ崎Ⅰ段丘面に対比される。和賀川との比高30m、標高159m前後である。今回の調査区は市道人当線沿いの東脇部分で原状は畑地、原野である。

2　遺跡の土層

遺跡の土層は、調査区の西側と東側で若干の相違が認められるが、基本的には次の６層に分けられる。

Ⅰ層　黒褐色土（10ＹＲ２／３）　表土層で砂質性があり、原野部分は藤の根等が見られる。層厚30cm前後である。

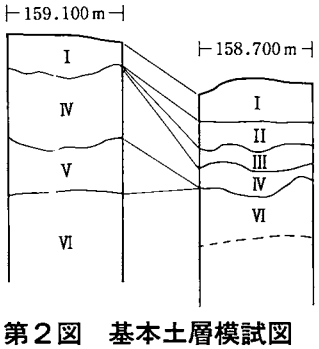
Ⅱ層　黒褐色土（10ＹＲ２／２）　調査区の東側に薄く堆積している。層厚０～18cm前後である。

Ⅲ層　暗褐色土（10ＹＲ３／３～黒褐色土　～10ＹＲ３／２）　調査区の東側に見られる、黄褐色土と黒褐色土の混合土で炭化物粒が多く見られる。層厚10cm前後である。

Ⅳ層　暗褐色土（10ＹＲ３／３）　遺構の検出面で、調査区の東側より西側に多く堆積して見られる土層で炭化物粒が微量に入る。層厚は40cm～10cmである。

Ⅴ層　褐色土（10ＹＲ４／６）　調査区の西側にだけ見られ、炭化物粒が微量に入る。層厚０～20cm。

Ⅵ層　オリーブ褐色土（2.5ＹＲ４／６～10ＹＲ４／６）　砂層で締りが良く比較的堅い。層厚は20cm以上である。



第２図　基本土層模試図

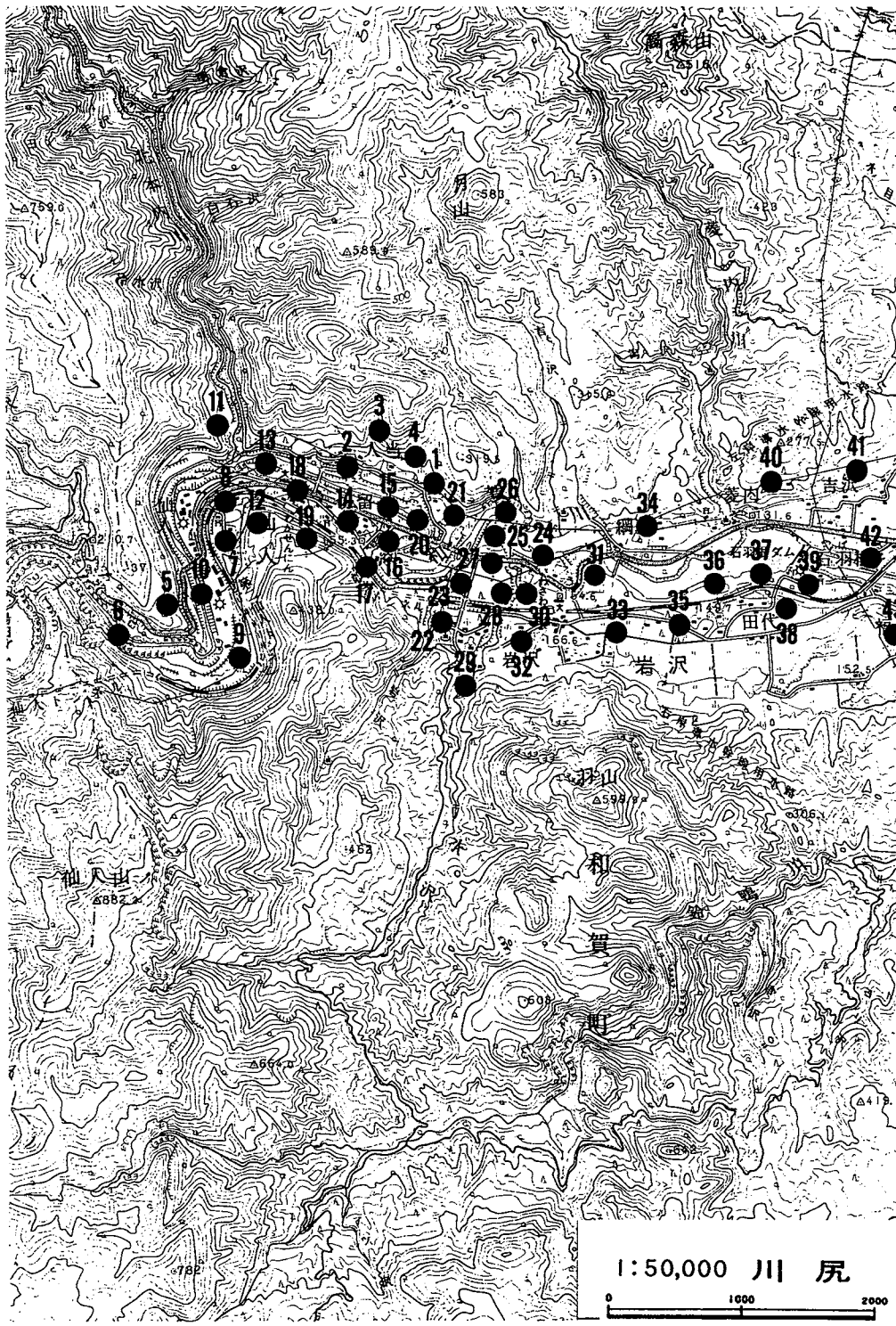
第３図　遺跡の位置と周辺の遺跡

3　周辺の遺跡

本遺跡の所在する仙人地区から岩沢地区の和賀川流域の北岸と南岸の段丘面上に、数多くの遺跡があることが分布調査等によって知られている。掲載した図幅の中には43ケ所の遺跡があり、これら遺跡の分布状況を見ると、その大半が和賀川沿いに発達した段丘上にあることが分かる。時代的にも旧石器時代から中世の各時代があり、中でも縄文時代の中期の遺跡が多いようである。この中で発掘調査によって明らかにされているものは、本遺跡の他に和賀仙人遺跡、下岩沢Ⅰ遺跡、愛宕山遺跡がある。和賀仙人遺跡は旧石器時代後期から縄文時代の遺物、下岩沢Ⅰ遺跡は縄文時代後期、晩期の土坑と前期から晩期と弥生時代の土器と石器、愛宕山遺跡は旧石器時代の石器が検出されている。

周辺の遺跡表

番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	所在地
1	人当Ⅰ遺跡	散布地	縄文土器（中期）　石斧　石錘　石匙	仙人9地割
2	人当Ⅱ遺跡	散布地	縄文土器	仙人8地割
3	人当Ⅲ遺跡	散布地	縄文土器（中期）	仙人8地割
4	人当Ⅳ遺跡	散布地	縄文土器（中期）	仙人8地割
5	夏畑Ⅰ遺跡	散布地	旧石器　縄文土器（中期）	仙人8地割
6	夏畑Ⅱ遺跡	散布地	石器	仙人2・8地割
7	和賀仙人遺跡	散布地	旧石器	仙人1地割
8	和賀仙人北遺跡	散布地	箆状石器	仙人1地割
9	和賀仙人南遺跡	散布地	石匙　先頭器	仙人2地割
10	和賀仙人西遺跡	散布地	縄文土器（中期）	仙人2地割
11	本内遺跡	散布地	縄文土器	仙人8地割
12	ぼうず山遺跡	散布地	旧石器　縄文土器　石鏃　石斧	仙人1地割
13	切留Ⅰ遺跡	散布地	縄文土器（中・後期）　石匙　石槍	仙人4地割
14	切留Ⅱ遺跡	散布地	縄文土器（中・後期）	仙人5地割
15	切留Ⅲ遺跡	散布地	縄文土器（中期）	仙人5地割
16	切留Ⅳ遺跡	散布地	縄文土器　石器	仙人6地割
17	切留Ⅴ遺跡	散布地	旧石器	仙人5地割
18	仙人駅前遺跡	散布地	縄文	仙人4地割
19	根洗沢遺跡	散布地	旧石器	仙人1地割
20	赤石Ⅰ遺跡	散布地	縄文土器　剥片石器	仙人9地割
21	赤石Ⅱ遺跡	散布地	縄文土器（晩期）	仙人9地割
22	法ケ松Ⅰ遺跡	散布地	縄文土器　石斧　石匙	岩沢8地割
23	法ケ松Ⅱ遺跡	散布地	石器	岩沢8地割
24	下岩沢Ⅰ遺跡	集落地	土坑　縄文土器　弥生土器　石器	岩沢9地割
25	下岩沢Ⅱ遺跡	散布地	縄文土器　剥片石器	岩沢8地割
26	下岩沢Ⅲ遺跡	散布地	縄文土器（晩期）　剥片石器	岩沢8地割
27	下岩沢Ⅳ遺跡	散布地		岩沢8地割
28	下岩沢Ⅴ遺跡	散布地	縄文土器（晩期）　剥片石器	岩沢8地割
29	水沢館	館跡	中世	岩沢8地割
30	岩沢Ⅰ遺跡	散布地	縄文土器（後・晩期）　石器	岩沢9地割
31	岩沢Ⅱ遺跡	散布地	縄文土器（後・晩期）　石器	岩沢9地割
32	岩沢Ⅲ遺跡	散布地	縄文土器（中期）　剥片石器	岩沢8地割
33	上山田塚遺跡	塚		岩沢10地割
34	鳥谷森遺跡	散布地	縄文土器（晩期）　石鏃　石匙	横川目字鳥谷森
35	下仙人遺跡	散布地	縄文土器　石器	岩沢9地割
36	下仙人館(別名岩沢館)	館跡	縄文土器　陶器　石器	岩沢9地割
37	御前淵遺跡	散布地	縄文土器（中期）	山口15地割
38	泉遺跡	散布地	縄文土器　須恵器	山口13地割
39	田代遺跡	集落地	縄文土器（晩期）　石皿　石棒　石鏃	山口14・15地割
40	愛宕山遺跡	散布地	旧石器	横川目5地割
41	田屋遺跡	散布地	縄文土器（晩期）	横川目6地割
42	吉沢遺跡	散布地	縄文土器	横川目8地割
43	福田遺跡	散布地	縄文土器（中・晩期）　石器	山口



第４図　遺跡周辺の地形とグリッド遺構配置図

Ⅲ　調査の方法と室内整理

1.調査の方法

（1）座標軸の設定とグリット配置について

調査範囲内に第X系の平面直角座標系にのる次の2点を設定した。

基点1（A）X＝－77230.00m　Y＝7990.00m　H＝158、845m

基点2（B）X＝－77200.00m　Y＝7960.00m　H＝159、197m

基準点AとBの球面距離は42.430mである。

この2点の内、基点2を原点として基点1を結ぶ直線と直行する線を基準線とした。この2直線をもとに、調査区全域をカバーする区画を5m毎に設定した。区画の名称は北西の隅から南にA、B、C・・のアルファベットを、東に1、2、3・・の数字を付し、D11、D12・・と呼称した。

（2）粗堀り、遺構検出、遺構の呼称、精査、実測、写真について

調査区は現道に沿った細長い範囲であるためすべて人力で表土除去と遺構検出をした。遺構の名称は先のグリットと同様にD11土坑とし同一区画内に同じものが2基以上ある場合には先に検出されたものからD11－1土坑、D11－2土坑と呼称した。

精査は土坑が検出されただけであることから2分法で行なった。

出土遺物は、遺構名、地区名、層位等必要事項を記入して取り上げた。

実測は平板測量と簡易遣り方測量を状況に応じて使用し、実測・図化は1／20の縮尺を基本とした。

写真は必要に応じてその都度行ない、35㎜版カメラ2台と6×7版カメラ1台を1セットとして撮影した。

2.室内整理

整理作業は、遺物については、洗浄後に遺物の仕分け、登録を行ない土器は接合復元、拓本、実測を、石器類は器種分類、実測を行なった。図面は原図の点検・修正・合成の後に第2原図を作成しトレース・図版の作成をした。

各図版の縮尺は各図版毎に縮尺を付してあるが、土坑は1／40を基本とし、方形土坑の図版は平面が1／120、断面が1／80である。遺物は1／2、1／3、1／4の縮尺を基本としている。

Ⅳ　検出された遺構と遺物

1.土坑

発掘調査区は和賀川沿いに東西に140m、南北２～６ｍの細長い範囲である。その中に土坑が総計20基検出された。内訳は縄文時代の土坑７基、新しい時期の土坑13基である。そのうち縄文時代の土坑の配置は西側に２基、東側に５基で、直線距離にして約70m離れている。

D10土坑

遺構（第５図・写真図版３）

調査区西側の平坦面で検出され、D11土坑は東側４ｍの所に検出されている。平面形は開口部・底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈する。埋土は７層に細分される。１層は黒褐色土、２層は暗褐色土、３層はオリーブ褐色土、４層は暗褐色土、５層は黒褐色土、６・７層はオリーブ褐砂土であり、炭化物粒やオリーブ褐色砂土を含んでいる。これら土層は埋土の状態から１、６層が自然層、７層が壁の崩落土、その他は人為的に投げられたと考えられる。

規模は開口部径94×100cm、頸部径87×78cm、底部径97×93cm、深さ62cmである。底面は若干の凹凸が認められるがほぼ平坦である。出土遺物は得られていない。

D11土坑

遺構（第５図・写真図版３）

D10土坑の東側に検出された。平面形は開口部、底部とも円形を呈し、断面形はフラスコ状を呈する。埋土は11層に細分される。１、３、４、８、９層は黒褐色土、２、５、６、７層は暗褐色土、10層はにぶい黄褐色土、11層は褐色土であり、３～８層には炭化物粒、５、８層にはオリーブ褐色砂土、９層には小礫を含んでいる。これら土層は１、２、10、11層が自然層と見られその他の層は人為的に投げられたと考えられる。

規模は開口部径130×116cm、頸部径96×102cm、底部径141×136cm、深さ107cmである。底面は平坦である。出土遺物は得られていない。

D29－１土坑遺構（第５図・写真図版３）

調査区東側の平坦面にD29－２土坑の一部を切って造られている土坑である。平面形は円形状で、断面形は深皿状を呈する。埋土は３層に細分される。何れも黒褐色土で、１層には炭化物粒が含まれている。２層は木根による攪乱部分である。埋土は自然堆積層である。

規模は開口部径92×96cm、底部径68×73cm、深さ31.2cmである。底面は中央部が若干窪んで

いる。

遺物（第５図－１・写真図版５－１）

埋土中から１の剥片が出土している。打面部が広く端部が狭い方形状を呈するもので、表面は上下から剥離された、小形の剥片である。この剥片を剥離する打面は剥離面を打面としたものである。使用、加工の痕跡は認められない。

D29－２土坑

遺構（第５図・写真図版３）

北西側でD29－１土坑に、北東側でD－29方形土坑によって切られている。平面形は開口部、底部とも隅丸方形状で、断面形は箱形状を呈する。埋土は３層に細分され４は黒褐色土、５、６層は人為的に投げ込まれたと考えられる。

規模は開口部径150×130cm、底部径131×88cm、深さ78cmである。底面はほぼ平坦である。壁は幾らか崩れている。

遺物（第５図－２～６・写真図版５－２～６）

埋土中から２～５の剥片と６の石錘が出土している。２～５の剥片の内２～４は小形の縦長剥片で、形状から石器製作の際の調整剥片と見られる。５は表面に自然面がのこっていることから原石から最初に剥離されてものと考えられる。６は小形の偏平な河原石の長辺の上下両端を打欠いて窪みをつけている石錘である。

D31－１土坑

遺構（第６図・写真図版４）

調査区東側の平坦面に単独で検出された。北側の１mの地点にD31－２土坑が隣接して見られる。平面形は開口部、底部とも円形で、断面形は鍋底状を呈する。埋土は４層に細分される。１、３層が黒褐色土、２層が暗褐色土でいずれも柔らかく締りのない土層であり、１、２層に炭化物粒を含んでいる。４層はオリーブ褐色土のブロックである。これらの土層は木根による攪乱が成されているが堆積状況から自然層と見られる。規模は開口部径119×130cm、底部径105×107cm、深さ44.5cmである。底面はほぼ平坦であるが、特に堅い部分は認められなかった。壁は幾らか崩れている様である。

遺物（第６図－７・写真図版５－７）

埋土中から７の剥片が出土している。一部に自然面が残る以外は前面に上下左右の方向からの剥離面が見られるものである。

D31－2土坑

遺構（第6図・写真図版4）

D31－1土坑の北側に検出され、検出時には1基の大形の土坑と思われたものである。精査の結果C31土坑によって上部を削られ、北側の一部が調査区外にあることが判明した土坑である。平面形は精査結果から開口部、底部とも円形状で、断面形はフラスコ状を呈する。埋土は6層に細分される。8、11、12、13層が黒褐色土、9層が褐色土、10層がにぶい黄褐色土で、9、12層以外の層に炭化物粒やオリーブ褐色砂土を含んでいる。これら土層は8、9、10、11層が人為的に投げ込まれた様であり、12、13層は壁の崩れや自然に堆積した土層と見られる。

規模は開口部径95×90±cm、頸部径90×90±cm、底部径110×100±cm、深さ92.1cmである。底部はほぼ平坦であり特に堅い所はないが、中央部に開口部径22×14cm、深さ9.8cmの平面形が楕円形状の副穴があり、そこから東西、南北方向に幅6～2cm、深さ4.3～2.6cmの溝が壁際まで延びている。溝の先端は膨らみ、小穴状となっている。

遺物（第6図8～15・写真図版5－8～15）

埋土中から8～13の土器破片と14の剥片と15の石錘の剥片が出土している。8、9は口縁部破片、10～13は胴部破片である。8の口縁は平坦であり、口唇部の断面形は方形状である。縄文は口縁端部から約2cm下方からS字状連鎖縄文が施されている。胎土は良好な粘土の中に僅かながら繊維を含んでいる。9の口縁は平坦であり、やや外側に外形している。口唇部の断面形態は丸みを帯び、外面には口唇部端から2cm幅の部文に棒状工具の側面による沈線状の刻が付けられている。縄文は口縁部文様帯の直下から一段撚りの縄に付けられた結節によるS字状連鎖縄文が施紋されている。胎土は比較的脆く繊維を含んでいる。10は胎土から9の胴部破片と思われる。縄文が上部より下位が荒く施紋されている。11、12は8の胴部破片と思われる土器片で、S字状連鎖縄文が施紋されている。13は縄文LRが施紋されている胴部破片である。胎土は粘土が緻密で焼け締りが良い。これら土器の内8～12は第2群4類に13は第4群に分類されるものである。14は石器製作の際に生じた調整剥片と見られるものである。背面側の右側縁に細かな調整剥離が見られる。15は欠損している石錘である。偏平な小形の河原石を利用したもので縁辺の一部の表裏面を打欠いて窪みを付けているものである。

C31土坑

遺構（第6図・写真図版4）

D31－2土坑の上部を切って造られている土坑である。検出時の黒褐色土中に焼土が見られ、北側の調査区外に大半があると思われる土坑である。平面形は調査結果の形状から楕円形状を呈すると思われる。断面形は皿状を呈している。埋土は7層に細分される。1層は焼土層で比

較的柔らかいもので幾らか汚れていた。2、5層は黒褐色土で何れも層厚が薄い土層である。3層は極暗褐色土で炭化物粒が微量に入っている。4層は褐色土で基本土層のV層に相当すると思われる。6、7層は暗褐色土で何れも微量の炭化物粒を含んでいる。

規模は東西方向の開口部が170cm、底部が136cm、深さ25.5cmである。

遺物（第6図－16～18・写真図版5－16～18）

埋土中から16、17の土器破片と18の剥片が出土した。16は全面ミガキがかけられた土器面に粘土紐を貼り付けて文様を展開している土器である。17は縄文LRが施紋されている胴部破片である。胎土は粘土が緻密で焼け締りが良い。これら土器は16が第3群4類に17が第4群に分類される。18は片面に表皮が見られる薄不整形剥片である。

方形土坑（第7図・写真図版1）

調査区東側の4m×45mの範囲に13基の方形土坑が2.84mから3.68mの間隔で検出された。埋土は柔らかい黒褐色土であり、一部には褐色土が混じるものである。

規模は最大のもので開口部径79×68cm、底部径75×64cm、最小のもので開口部径48×55cm、底部径42×44cm、検出面からの深さ11～37cmである。この土坑群は断面観察から表土近くから掘り込まれていることから新しい時期のものと見られるが地権者の話しではその様な穴は掘った事がないとのことである。土坑の性格や時期については、出土遺物も無いことから所属時期は明確に出来ないが、近世以降の時期と思われ、何かを植えた穴の様である。

2.遺構外の出土遺物

遺構外から出土した遺物は土器、石器、石製品がある。これらの出土遺物は基本土層のI層～Ⅳ層から出土したが、その大半は攪乱された土層からの出土である。

土器（第8、9図・写真図版6）

出土した土器は縄文時代から弥生時代までのものであるが、いずれも出土量が少ない。土器の分類は以下のように分類した。

第1群土器：縄文時代早期の土器

第2群土器：縄文時代前期の土器

第3群土器：縄文時代中期の土器

第4群土器：縄文時代晩期の土器

第5群土器：弥生時代の土器

第１群土器（第８図19・20・21、写真図版６－19・20・21）

１類：貝殻文と刺突文を施文している土器類（19）

19は口縁部破片で口縁部は一部にかろうじて残っている。それによると口縁部は若干内湾し、口縁部は丸みを帯びているようである。文様は貝殻文と棒状工具による刺突文の組み合わせによって構成している。外面の文様は貝殻腹縁刺突文が口唇部から２㎝の幅で縦位に施紋し、その下位に棒状工具による刺突が２列付け、更に下位には貝殻条痕らしきものが斜位に見られる。内面は貝殻条痕文が横位に見られる。胎土は粒の細かい粗砂が入りやや脆い。

２類：貝殻条痕文だけが施文されている土器類（20）

20は胴部破片である。外面の文様は貝殻条痕文が横位に施紋されている。内面は無文でナデ付けの様である。胎土は細砂を微量に含み、焼成は良好で比較的堅く締まっている。

３類：表裏に縄文を施文している土器類（21）

21は胴部破片である。表面には直前段反撚りＬＬによる撚糸文が施文されている。裏面には節の太い単節斜縄文ＬＲが施文されている。胎土は繊維、細砂、石英粒を含んでいる。

第２群土器（第８図22～29、写真図版６－22～29）

１類：複節による羽状縄文を施文している土器類（22、23）

掲載したもの以外に、数点の出土がある。22、23とも口縁部破片である。22は口縁が平坦で、口唇部が角張るもので、器形は口縁部が外側に外反する深鉢形である。縄文は口縁部から約１㎝下位の部分から、縄文原体ＲＬＲ、ＬＲＬの２種類による羽状縄文を施文している。胎土は砂粒、繊維を含み焼成は比較的堅く良好である。23は口唇部が丸みを持つもので、器形は口縁部が外側に外反する土器の様である。縄文は口端部直下から原体ＲＬＲを方向を替えて羽状縄文を施文している。胎土は砂粒を多く含み、繊維を僅かに含んでいる。

２類：単節斜縄文を施文している土器類（24～27）

この土器類も極僅かの出土である。24、25は原体の末端部に環を造ってループ文を作出している土器類である。原体はいずれもＲＬの単節である。胎土は粘土に繊維を多量に含んでいるもので、比較的堅く締まっている。26は24、25の底部近くの破片と思われるもので、原体ＲＬが施文されている。胎土は24、25と同じである。形状からこの土器は丸底状に近いと思われる。

３類：単節による羽状縄文を施文している土器類（27）

27は深鉢胴部破片である。縄文はＲＬとＬＲの２種の原体を結束した羽状縄文を施文している。胎土は粘土に砂粒を含み、微量の繊維を含むもので比較的堅い。

４類：Ｓ字状縄文を施文している土器類（28～30）

極僅かであるが出土している。原体や胎土等から２ないし３個分くらいがあったようである。いずれも胴部破片で、文様は蔓を軸に巻き付けて、Ｓ字状の連鎖沈文を施文しているものである。胎土は粘土が主で極僅かに砂粒が入り、微量の繊維が混入している。

第３群土器（第９図31～37、写真図版６－31～37）

１類：施文具によって文様を施文している土器類（31、32）

いずれも口縁部破片で口唇部の形態は丸みを帯び、平坦である。31は口縁部の外周に棒状工具の側面を押圧してハ字状に文様を施文するもので、縄文は見られない。胎土は粘土が多く、堅く緻密である。32は原体Ｒの単軸絡条体を施文後に竹管状工具による波状の平行沈線を２段に巡らして文様を施文しているものである。胎土は粘土に砂粒が混じるもので比較的堅い。

２類：粘土紐と原体側面押圧によって文様を施文している土器類（33）

１点見られた。33は口縁部破片で口唇部は丸みを帯びたもので平坦である。文様は粘土紐によって口縁部と胴部に区画し口縁部には更に三角形状の区画を施している。縄文は区画した中に原体ＬＲの側面を押圧して羽状に作出している。胎土は粘土に砂粒を含み、比較的脆い。

３類：隆起線と磨り消しによって装飾文様体を展開する土器類（34～37）

36は口縁部破片で、他は体部破片である。何れも細い粘土紐を貼り付けた後に断面三角形状の粘土帯でＵ字状の文様を展開しているものであり、区画された中に原体ＲＬの縄文を施文している。胎土は粘土に砂粒が混じっているもので、焼成は良く比較的堅い。

第４群土器（第９図38～41、写真図版６－38～41）

平行沈線と棒状工具の刺突によって文様を施文している土器であり、器形は深鉢、鉢と思われる。38は口縁部破片で文様は口唇部に棒状工具による側面の刺突を巡らし、口唇部内面に１条の沈線と外面に２条の沈線が見られ、縄文は見られない。胎土は粘土が主体で堅い。

39は口唇部破片で、内面に平行する２条の沈線、外面に口唇部直下に短い沈線、その下位に３条の沈線を施文し、縄文は文様帯下位に原体ＬＲを施文している。40は体部破片で、１条の沈線と縄文は原体ＬＲが施文されている。胎土は粘土が主体で堅い。41は口縁部破片で口唇部上と内面に１条の沈線、外面に平行する３条の沈線が見られる。沈線は半截竹管状工具によるものと思われる。胎土は粘土が主体で比較的柔らかい。

第５群土器（第９図42～46、写真図版６－42～46）

いずれも破片であり本来の器形を把握できないが何れも、甕形土器の破片と思われるものである。42～44には平行する沈線が見られ、43は半截竹管状工具による細い平行沈線が横と斜位

に施文されている。縄文は44、46が付加条縄文、45が単節ＲＬが施文されている。特に、46は縄文施文後に表面をナデているもので、一部に炭化物が付着している。

石器・石製品（第10～12図、写真図版７、８）

石器は掲載した以外にはフレイクが僅かにあるだけである。出土層位は土器と同様である。石器種としては、石鏃、石匙、削器、掻器、磨石、石錘、石製品としては玦状耳飾りが１点出土している。

石鏃（第10図47、48・写真図版７－47、48）

47は無柄凹基式のもので、側縁の一部が欠けている。48は薄での折れた剥片を利用したもので、表裏面に１次剥離面が残され、基部は折れ面を利用している。

石匙（第10図49、50・写真図版７－49、50）

49、50とも縦長の剥片を利用したものである。49は片面全域に調整剥離が施され、表面には１次剥離面を残し、刃部の一部に剥離が見られる。50も同様に調整剥離が表面にのみ施され、１次剥離面は表面の一部と裏面の全面に残されている。

石箆（第10図51・写真図版７－51）

51は横広の剥片を利用した石箆である。片面は全面に調整剥離が施され、裏面には縁辺部に極僅かに調整剥離が見られる。

石槍（第10図52・写真図版７－52）

52は上下両端が折れているため良く分からないが、石槍と思われるものである。調整は表裏面に施され、細長く整形されている。

削掻器類（第10図53～第11図63・写真図版７－53～８－63）

剥片の縁辺部に微細な剥離痕が見られるものを一括した。剥離痕は、53が先端部、54、55が先端部の側縁の一部、56が先端部の表裏面、57が側縁部、59が石箆状の形態をしている先端部、61～63は側縁の一部に見られる。58は剥片の側縁部に細かい剥離が見られるもので、光沢が他の剥片類とは若干違うことからより古い時代の可能性があるもので、打面調整の剥片ともとれるものである。

石核（第11図64・写真図版８－64）

掲載した以外にも数点ある。64は楕円形状の礫の一部に打撃を加えて剥片を剥離し、残された面を打面として剥片を剥離している。剥離された剥片自体は残っていないが剥離面からの観察によれば、いずれも縦長剥片状の剥片が剥離されているようである。

石斧（第11図65・写真図版８－65）

65は先端部の一部欠くがほぼ完形品である。平面形はバチ形で断面形は側縁を面取りした、膨らみのある長方形状である。先端部は片側が減っているようである。

磨石（第11図66～69・写真図版８－66～69）

４点の出土がある。66は断面三角形状の石の一側縁が磨り減って平坦になっているもので、一部に内欠きによると思われる剥離痕跡が見られる。67～69は扁平な礫の一部を磨っている痕跡が見られるものである。

石錘（第11図70～第12図85・写真図版８－70～85）

14点の出土を見た。何れも扁平な河原石の一部の表裏を打ち欠いて窪みを付けているものである。大きさは最大長8.1㎝、最大幅9.2㎝、最小長4.6㎝、最小幅4.4㎝、最大重量280ｇ、最小重量50ｇである。

石皿（第11図86・写真図版８－86）

86は扁平な長楕円形状の石の片面が極僅かに窪んで見られる所から石皿としたものであるが果して石皿となるか否かについては良く分からないものである。

玦状耳飾り（第11図87・写真図版８－87）

87の玦状耳飾りの破損品が１点出土した。扁平な石の中央部を両側から穿孔し一部に切込みを入れて、両面を磨いて加工したものであるが、切込み部の反対側で折れている。この折れは使用中か、製作途中か、捨てられてから折れたものかについては不明である。

V　まとめ

今回の調査で検出された遺構、遺物について述べてきたがここではそれらに対する若干の考察をして、まとめとする。

1.遺構

検出された遺構は土坑だけであり、しかも縄文時代の土坑は7基と少なく、他は時期が不明のものである。以下、縄文時代の土坑について述べる。

縄文時代の土坑は平坦面に約70m離れて西側に2基、東側に5基検出されている。土坑の断面形態は、フラスコ形3基、ビーカー形2基、皿状2基である。規模はフラスコ形とビーカー形では、フラスコ形の開口部径が94～130cm、深さ62～106cm、ビーカー形の開口部径が119～150cm、深さ44～78cmと、土坑としては普通の規模である。埋土は西側の土坑が埋め戻され、東側は自然堆積によるものが殆どである。これら土坑を今回の調査区に限定して占地を見るとフラスコ形の土坑は調査区の東側と西側に、ビーカー形、皿形が東側に検出されている。土坑群としては遺跡全体を調査したものではないことから判然としないが、調査状況や占地から見て2ケ所に分かれる様である。がこれら土坑群は時期的に分けられるものか集団の違いか、場の使い方なのかについては不明である。また、フラスコ形土坑のうち、東側に検出したD31－2土坑は真仕切とするには土坑が小さいことから排水の役目をしたものと考えられる浅い溝が底面に十字形に作られており、土坑の機能を考えるうえで貴重な資料をなるであろう。これら土坑の時期は出土した遺物から特定できる資料は少ないが、調査区の東側のD31－2土坑やC31土坑の埋土中に土器が検出されたものがある。それによると第2群土器3類や第3群4類と第4群土器が検出されている。このことから土坑の時期は、縄文時代前期から晩期に位置付けられる可能性がある。

2.遺物

今回の調査で検出した遺物は層位的に見ると出土層順は明確に捉えられるものはなく、何れも出土量は多くない。

土器

土器は縄文時代早期から弥生時代までの各時期が少量ずつ検出され、しかも殆どが小破片であるため器形や文様の全体を把握出来るものは少ない。

第1群土器は縄文時代早期のものであり、1類は貝殻腹縁刺突文と棒状工具による刺突文の組合せによって文様を施文しているもので、類例としては青森県の鳥木沢遺跡の第1群5類土器の特徴と似通ったものである。2類は貝殻条痕文が施文されているもので、破片であること

から文様がそれだけであるか否かについては不明であるが、現時点では寺の沢式土器の特徴を持っているものと言える。3類は表裏縄文であり、早期末様のものとして捉えることができる。早稲田5類に比定できるものであろう。

第2群土器は縄文時代前期のもので、1類は原体が複節の羽状縄文を施文し、繊維を含む胎土であることや、口唇部の形態が角張る等の特徴が見られることから関東の花積下層式土器や東北南部の上川名Ⅱ式土器に比定される。2類はループ文を施文する土器類であり早稲田6類や長七谷地Ⅲ群土器に比定されるものであろう。3類は結束による羽状縄文を施文しているものであり、2類の範疇に含まれるものと思われる。4類やD31－2土坑出土の9～12はS字状の縄文や沈線文を施文しているものであり、文様の特徴から大木2b式土器に比定できよう。

第3群土器は縄文時代中期のもので、1類と2類はハ字状の沈線や平行する沈線、縄文原体側面圧痕と粘土紐によって文様を施文しているものであり、大木7式の範疇に含まれるものである。3類は隆起線と磨り消しによって文様を展開しているもので、大木10式に比定されるものである。

第4群土器は縄文時代晩期のもので、平行する沈線や短沈線等で文様を施文しているもので文様や器形等から大洞C1ないしC2に平行するものと思われる。

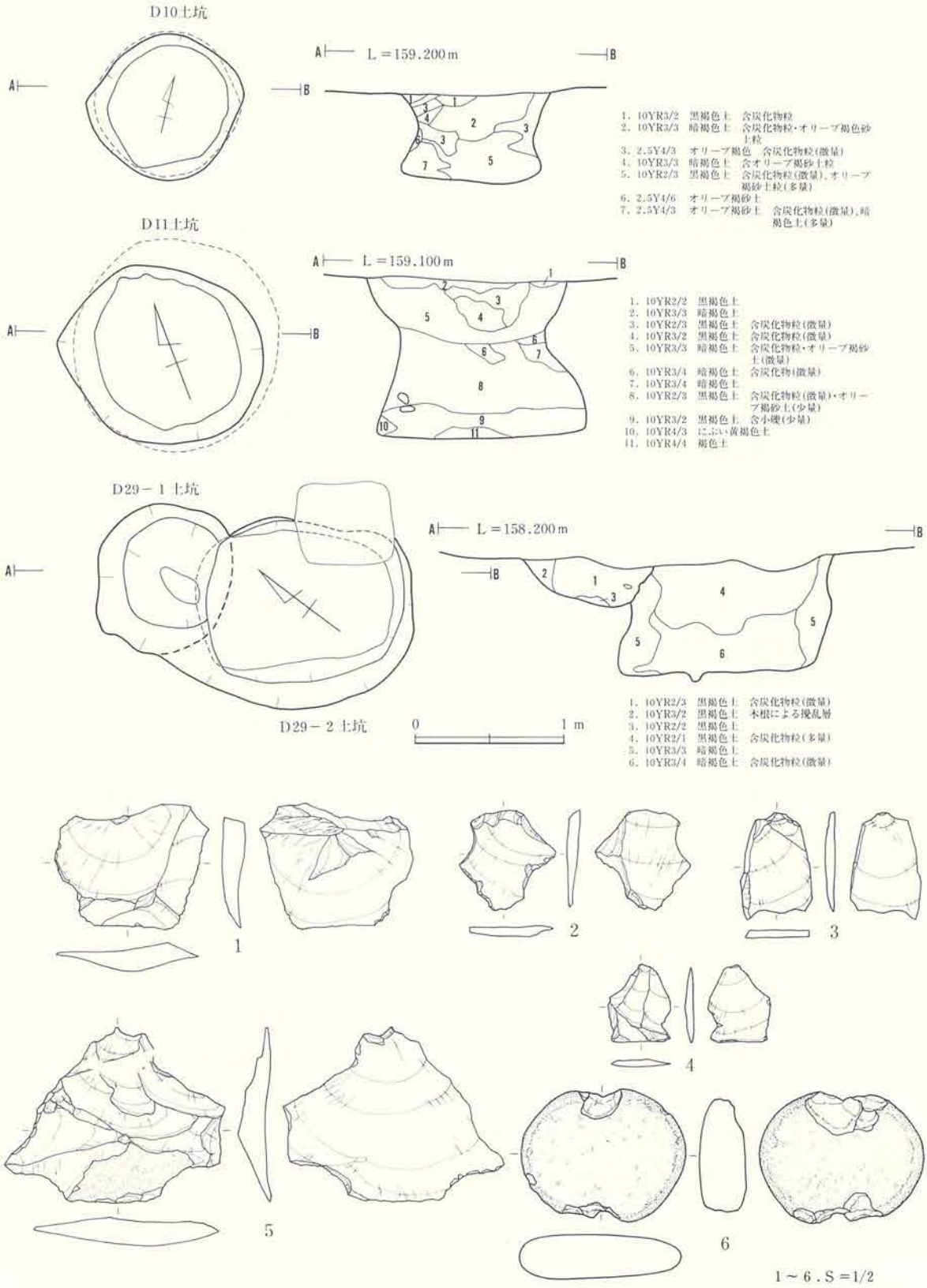
第5群土器は弥生時代後期のもので、縄文や沈線による文様から天王山系のものと考えられる。

石器

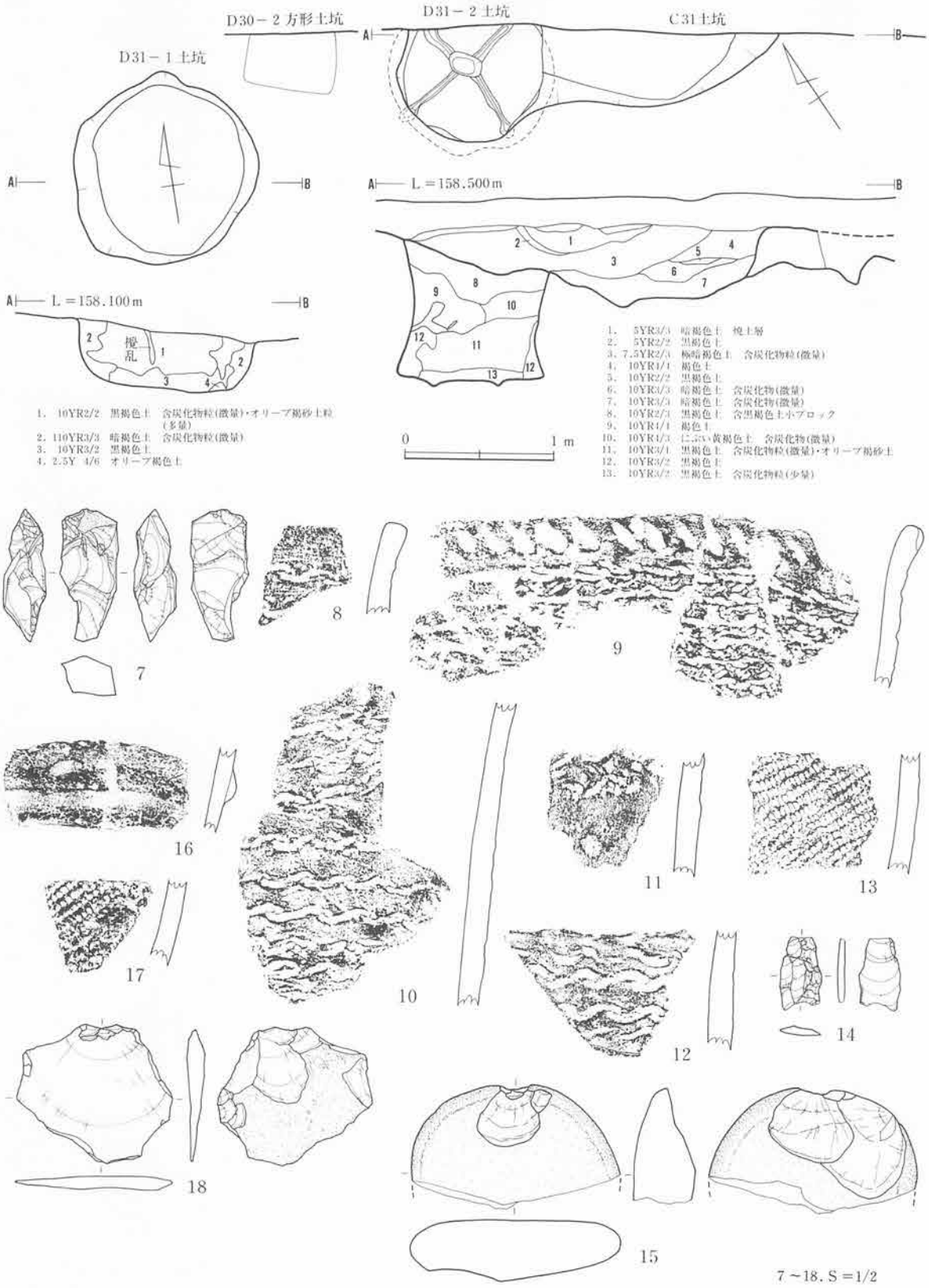
石器は出土量が少ないが剥片石器、礫石器とも出土し、他の遺跡から出土している石器種と変わりないものが出土している。この中で特に多い石器種を上げれば石錘が他の石器種から見て多いのが今回の調査区での特徴として捉えることが出来る。また、石器群の特徴としては縄文時代でも古い時期に見られるものが多い。

3.遺跡について

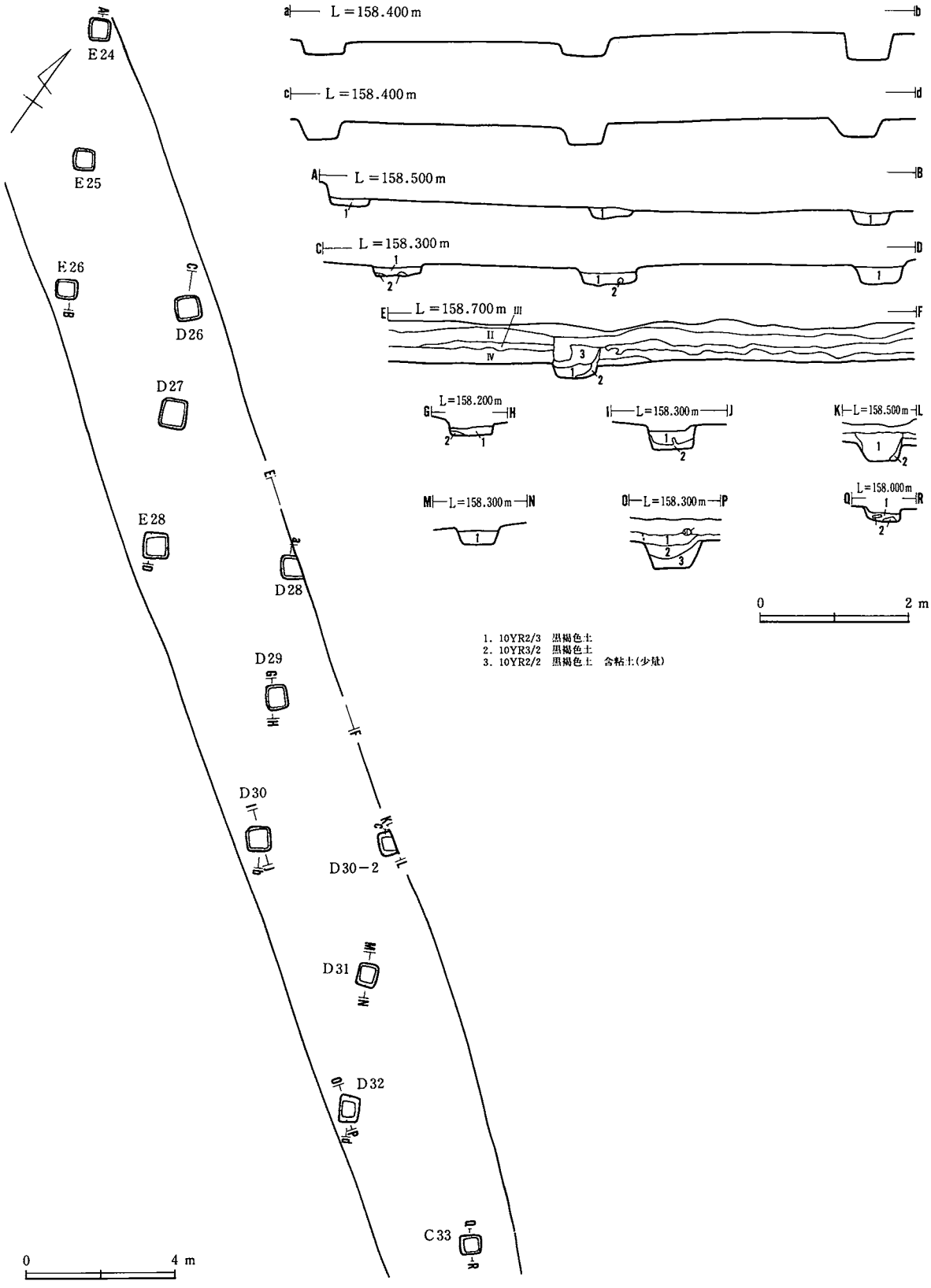
今回の調査は調査範囲が東西に細長い範囲であり遺跡の一部分を調査したにすぎず詳細については不明であるが、縄文時代の早い段階から人々が活動し、石錘が比較的多く出土していることから漁労もしていたことが伺うことができた。また遺跡の広がりとしては、和賀町教育委員会での分布調査の結果と、今回の調査結果から見ると北側の山裾部分まで広がるようであり、遺跡の主体となる部分は今回の調査区の北側に広がっているものと推測される。


D10土坑
A
B
L＝159.200m
1. 10YR3/2 黒褐色土 含炭化物粒
2. 10YR3/3 暗褐色土 含炭化物粒・オリーブ褐色砂土粒
3. 2.5Y4/3 オリーブ褐色 含炭化物粒(微量)
4. 10YR3/3 暗褐色土 含オリーブ褐砂土粒
5. 10YR2/3 黒褐色土 含炭化物粒(微量)、オリーブ褐砂土粒(多量)
6. 2.5Y4/6 オリーブ褐砂土
7. 2.5Y4/3 オリーブ褐砂土 含炭化物粒(微量)、暗褐色土(多量)
D11土坑
L＝159.100m
1. 10YR2/2 黒褐色土
2. 10YR3/3 暗褐色土
3. 10YR2/3 黒褐色土 含炭化物粒(微量)
4. 10YR3/2 黒褐色土 含炭化物粒(微量)
5. 10YR3/3 暗褐色土 含炭化物粒・オリーブ褐砂土(微量)
6. 10YR3/4 暗褐色土 含炭化物(微量)
7. 10YR3/4 暗褐色土
8. 10YR2/3 黒褐色土 含炭化物粒(微量)・オリーブ褐砂土(少量)
9. 10YR3/2 黒褐色土 含小礫(少量)
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色土
11. 10YR4/4 褐色土
D29－1土坑
L＝158.200m
1. 10YR2/3 黒褐色土 含炭化物粒(微量)
2. 10YR3/2 黒褐色土 木根による攪乱層
3. 10YR2/2 黒褐色土
4. 10YR2/1 黒褐色土 含炭化物粒(多量)
5. 10YR3/3 暗褐色土
6. 10YR3/4 暗褐色土 含炭化物粒(微量)
D29－2土坑
0
1 m
1
2
3
4
5
6
1～6. S＝1/2

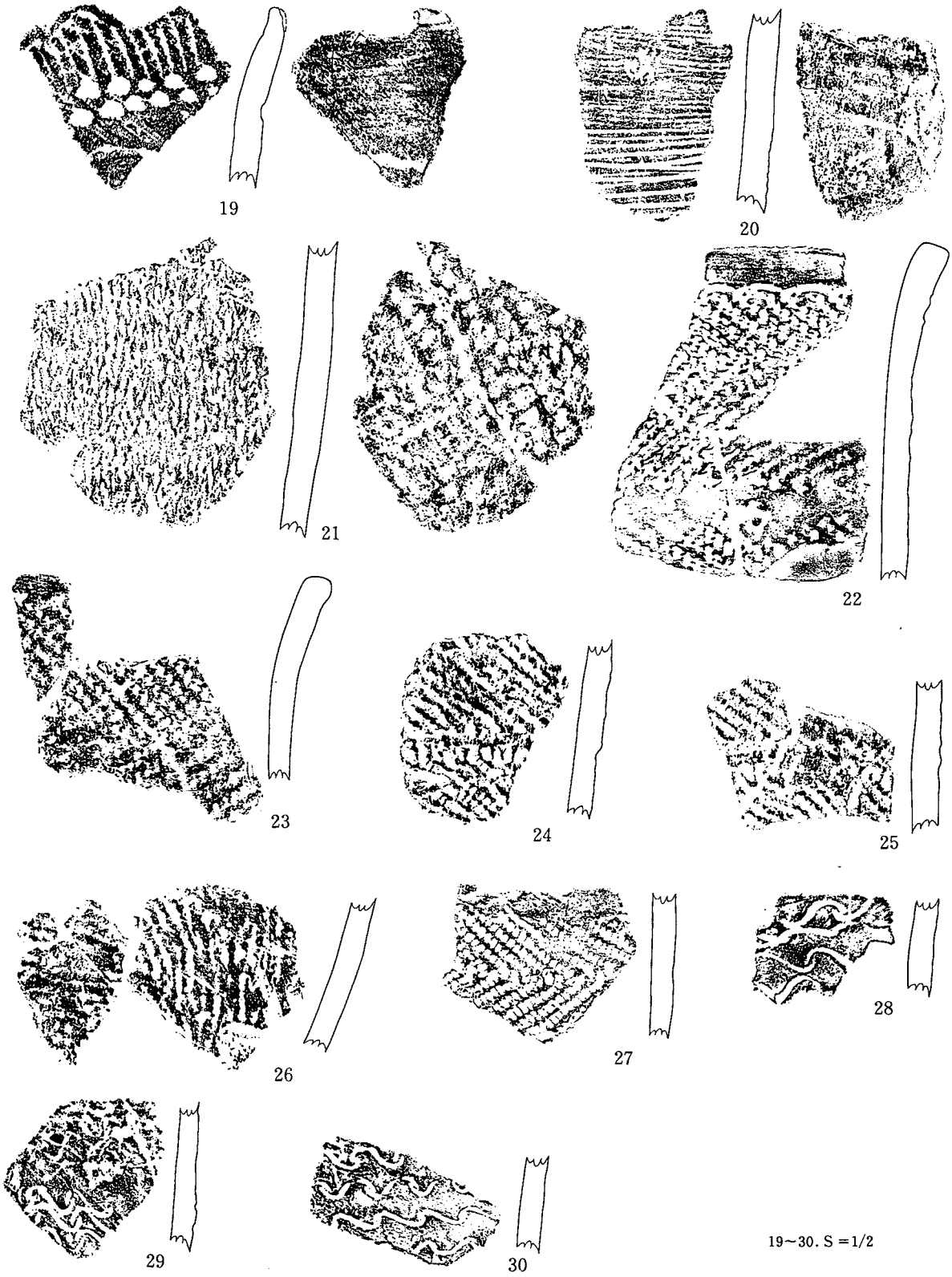
第5図　土坑と出土遺物


D30－2 方形土坑
D31－1 土坑
D31－2 土坑
C31土坑
A
B
L＝158.100m
L＝158.500m
撹乱
1. 10YR2/2 黒褐色土 含炭化物粒(微量)・オリーブ褐砂土粒(多量)
2. 110YR3/3 暗褐色土 含炭化物粒(微量)
3. 10YR3/2 黒褐色土
4. 2.5Y 4/6 オリーブ褐色土
1. 5YR3/3 暗褐色土 焼土層
2. 5YR2/2 黒褐色土
3. 7.5YR2/3 極暗褐色土 含炭化物粒(微量)
4. 10YR4/4 褐色土
5. 10YR2/2 黒褐色土
6. 10YR3/3 暗褐色土 含炭化物(微量)
7. 10YR3/3 暗褐色土 含炭化物(微量)
8. 10YR2/3 黒褐色土 含黒褐色土小ブロック
9. 10YR4/4 褐色土
10. 10YR4/3 にぶい黄褐色土 含炭化物(微量)
11. 10YR3/1 黒褐色土 含炭化物粒(微量)・オリーブ褐砂土
12. 10YR3/2 黒褐色土
13. 10YR3/2 黒褐色土 含炭化物粒(少量)
0
1 m
7～18. S＝1/2

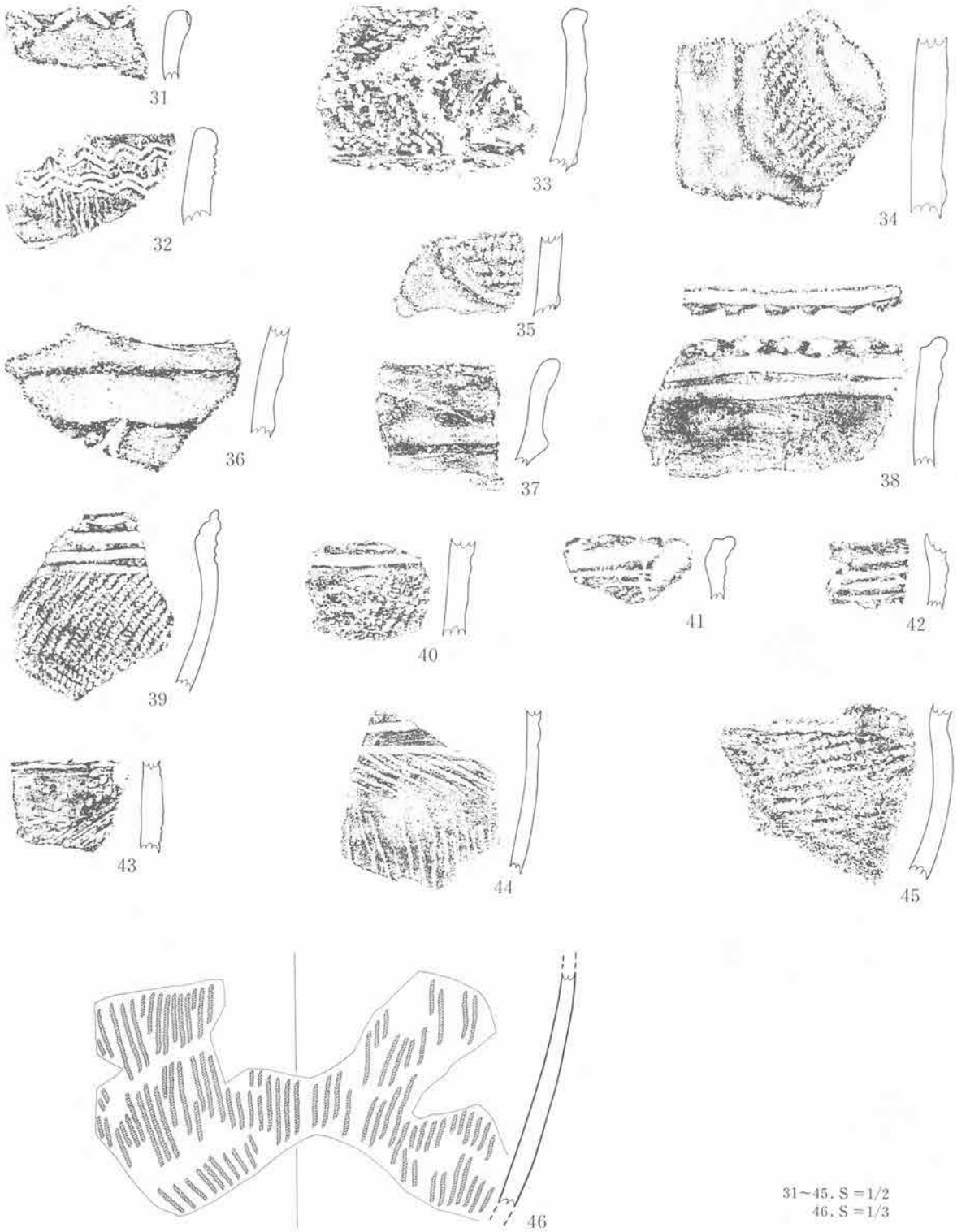
第6図　土坑と出土遺物


E24
E25
E26
D26
D27
E28
D28
D29
D30
D30－2
D31
D32
C33
a L＝158.400 m b
c L＝158.400 m d
A L＝158.500 m B
C L＝158.300 m D
E L＝158.700 m F
G L＝158.200 m H
I L＝158.300 m J
K L＝158.500 m L
M L＝158.300 m N
O L＝158.300 m P
Q L＝158.000 m R
0 2 m
1. 10YR2/3 黒褐色土
2. 10YR3/2 黒褐色土
3. 10YR2/2 黒褐色土 含粘土(少量)
0 4 m

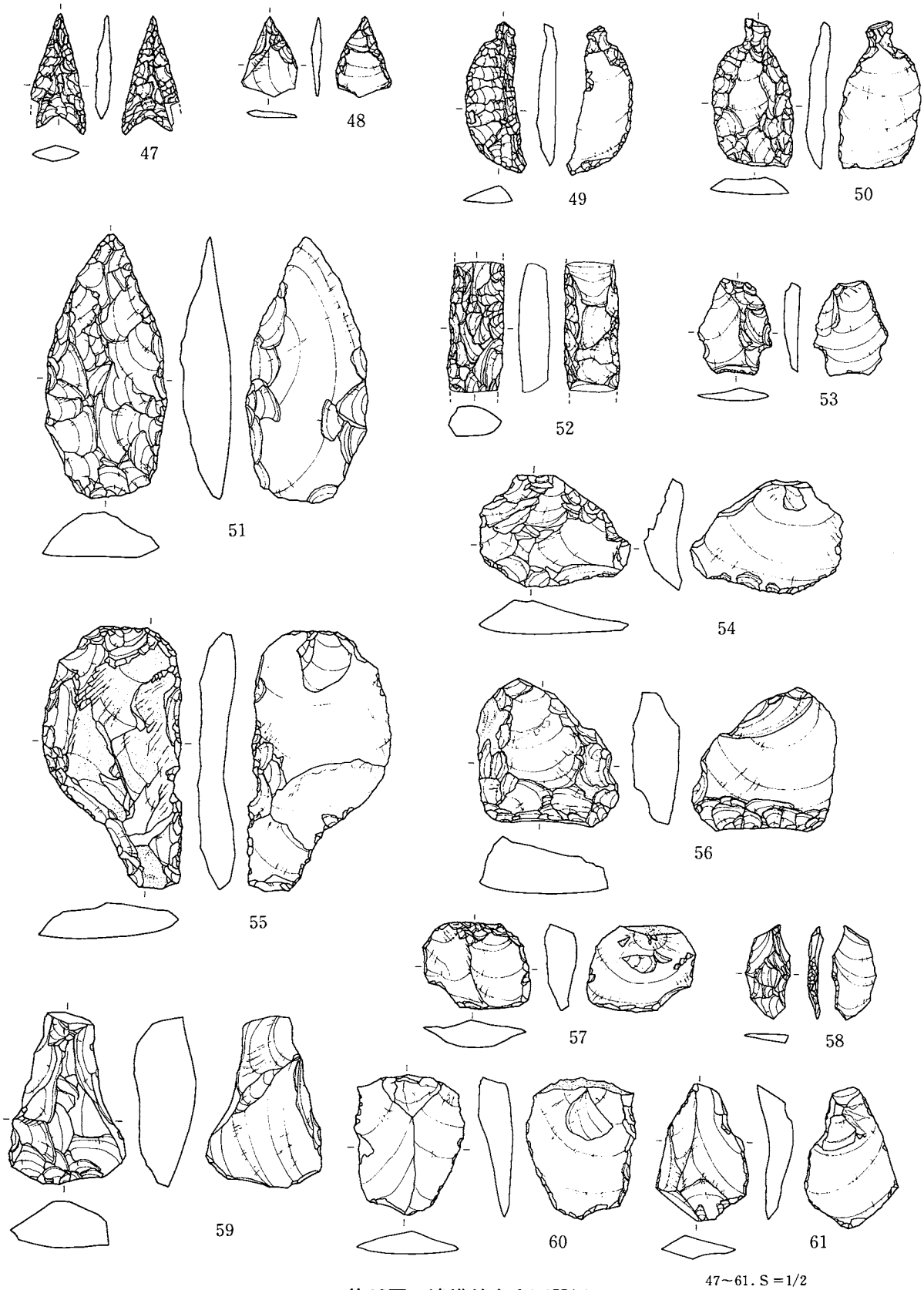
第7図　方形土坑



第８図　遺構外出土土器(1)

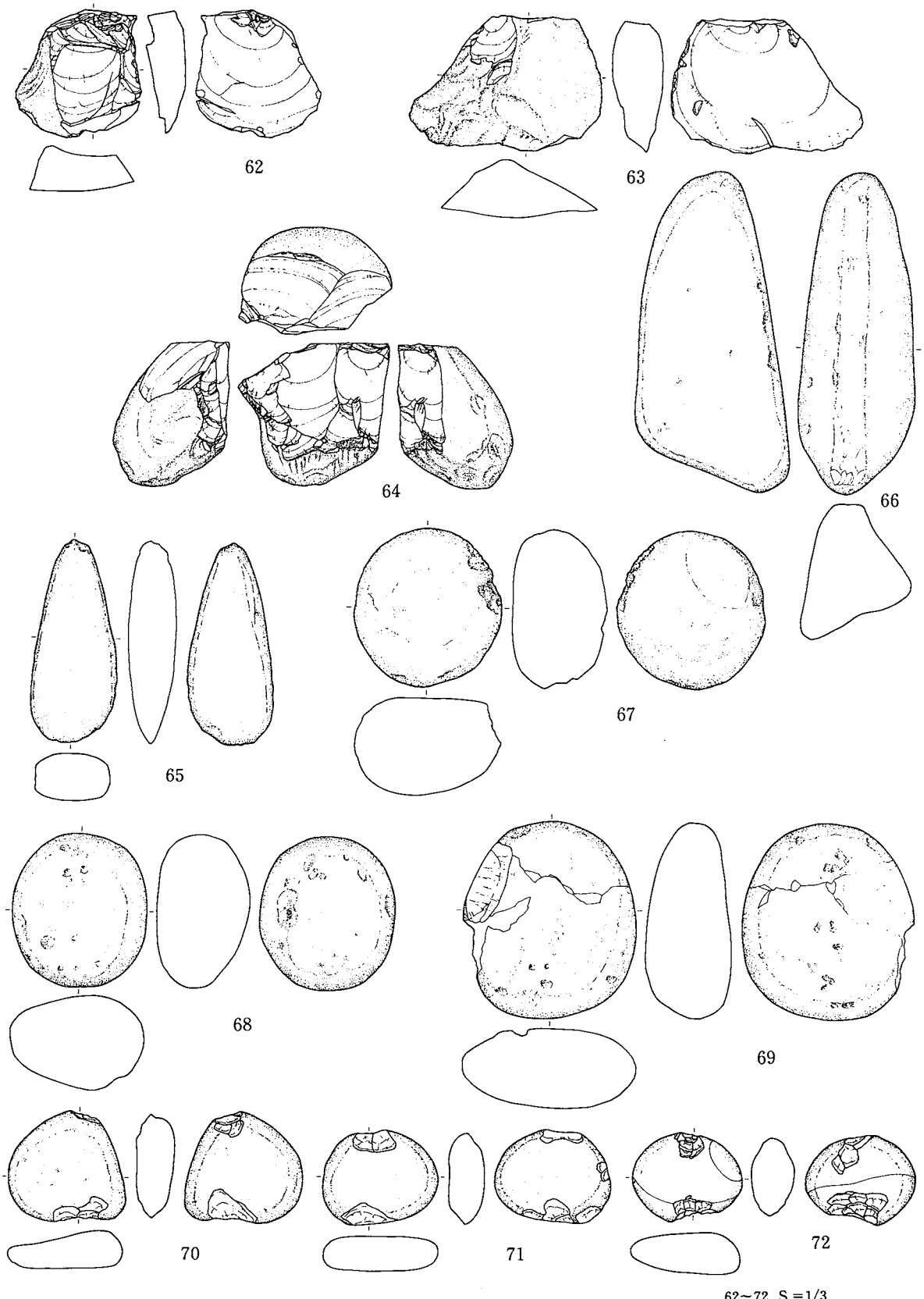


第９図　遺構外出土土器(2)



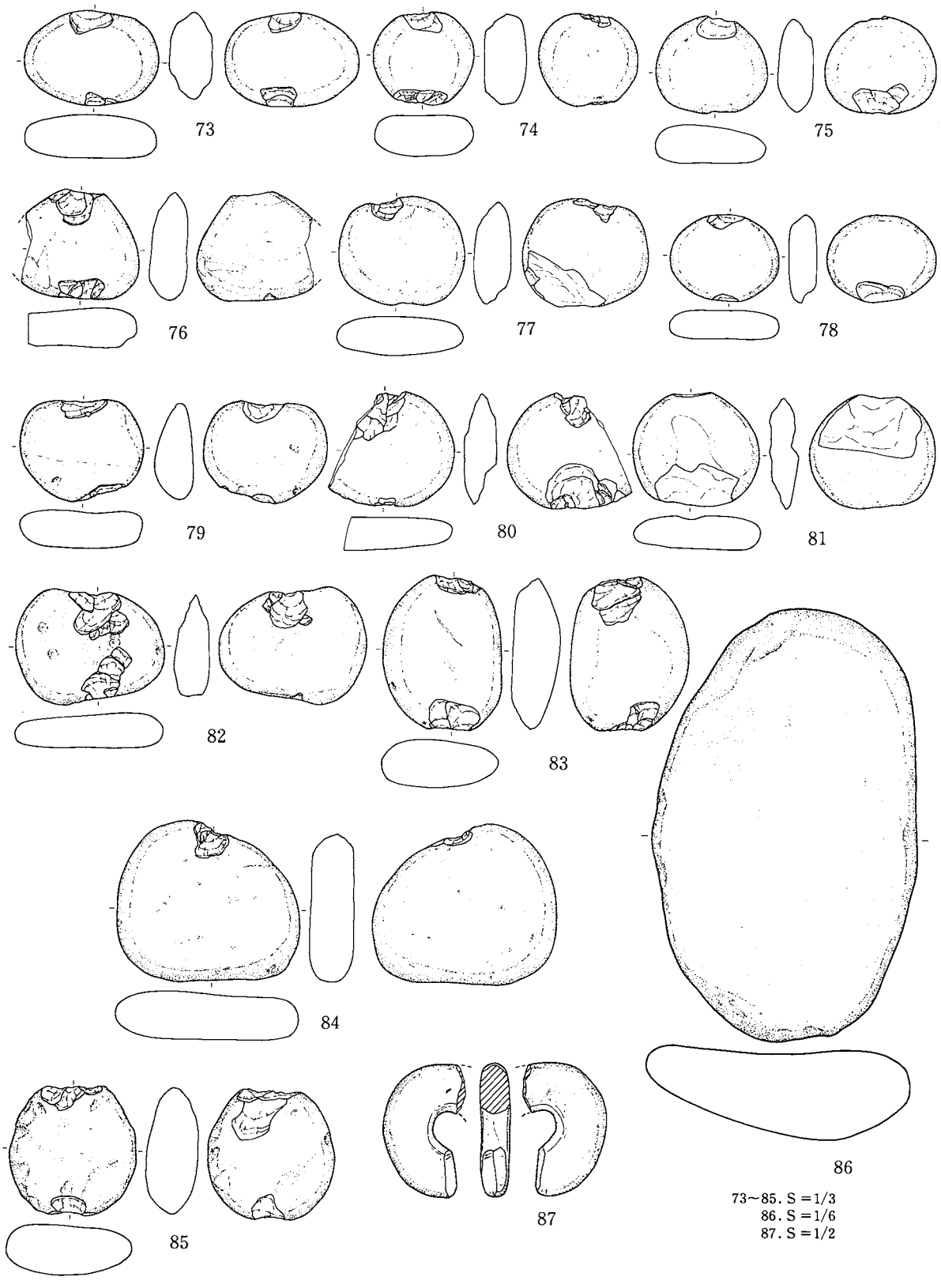
47～61．S＝1/2

第10図　遺構外出土石器(1)



62～72. S＝1/3

第11図　遺構外出土石器(2)



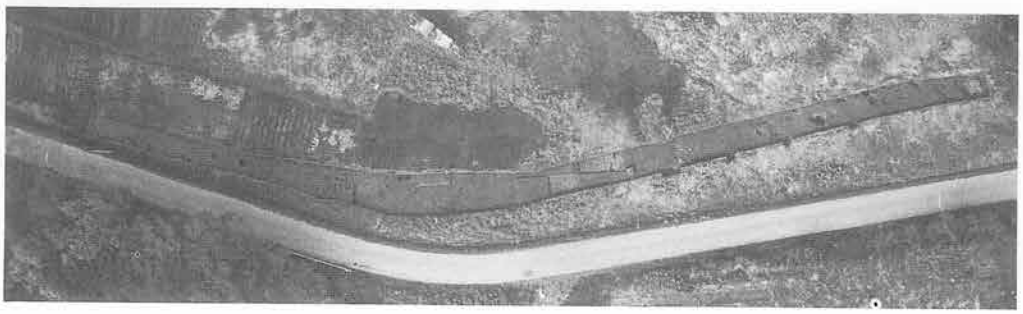
第12図　遺構外出土石器(3)

人当Ⅰ遺跡出土石器計測表

No.	図版NO	出土地点	器種	計測値(cm)、(g) ()は破片部分				石質	産地
				長さ	幅	厚さ	重量		
1	第5図1	D29－1土坑・埋土中	剥片	4.2	5.2	0.8	14.5	泥質凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
2	第5図2	D29－2土坑・埋土中	剥片	3.4	3.2	0.4	4.2	泥質凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
3	第5図3	D29－2土坑・埋土中	剥片	3.7	2.4	0.3	3.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
4	第5図4	D29－2土坑・埋土中	剥片	2.7	2.1	0.3	1.75	流紋岩極細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
5	第5図5	D29－2土坑・埋土中	剥片	5.9	7.5	0.9	28.3	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
6	第5図6	D29－2土坑・埋土中	石錘	4.5	5.5	1.6	60.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
7	第6図7	D31－1土坑・埋土中	石核	4.5	2.0	1.4	11.5	粘板岩	仙人付近 古生界
8	第6図14	D31－2土坑・埋土中	剥片	(2.4)	1.4	0.3	0.8	泥質凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
9	第6図15	D31－2土坑・埋土中	石錘	(4.2)	7.0	2.0	55.9	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
10	第6図18	C31土坑・埋土中	剥片	5.3	4.6	0.5	12.05	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
11	第10図47	F18区・Ⅲ層中	石鏃	4.2	1.9	0.5	3.25	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
12	第10図48	F23区・Ⅰ層下位	石鏃	2.8	1.9	0.3	1.4	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
13	第10図49	D34区・Ⅱ層	石匙	5.1	2.2	0.6	5.85	珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
14	第10図50	E24区・Ⅰ層	石匙	5.1	2.8	0.7	9.6	泥質凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
15	第10図51	E25区・Ⅰ層	石匙	9.1	4.2	1.6	55.2	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
16	第10図52	E25区・Ⅱ層	石匙	4.5	1.9	1.0	9.6	流紋岩極細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
17	第10図53	表採	削器	3.2	2.5	0.5	4.45	粘板岩	仙人付近 古生界
18	第10図54	D32区・Ⅱ層	削器	3.9	5.2	1.1	20.75	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
19	第10図55	E25区・Ⅰ層	削器	9.0	5.0	1.2	65.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
20	第10図56	E27区・Ⅰ層下位	削器	5.1	4.9	1.9	46.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
21	第10図57	D33区・Ⅱ層	削器	3.0	3.8	1.6	10.85	流紋岩極細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
22	第10図58	E27区・Ⅰ層	剥片	3.3	1.5	0.3	1.3	珪質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
23	第10図59	D33区・Ⅱ層	削器	5.9	4.0	2.0	31.8	流紋岩極細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
24	第10図60	D33区・Ⅱ層	削器	4.9	3.8	1.1	17.3	流紋岩極細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
25	第10図61	D29区・Ⅰ層下位	削器	4.8	3.1	0.9	10.7	流紋岩極細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
26	第11図62	E27区・Ⅰ層下位	削器	6.5	6.4	2.3	100.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
27	第11図63	D30区・Ⅱ層下位	削器	6.9	9.8	2.9	200.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
28	第11図64	C34区・Ⅰ層	石核	7.3	7.7	5.6	340.0	硬質泥岩	奥羽山地 新第三系中新統(川尻以西)
29	第11図65	表採	石斧	10.3	4.3	2.4	160.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
30	第11図66	F22区・Ⅱ層	磨石	16.5	5.9	6.5	840.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
31	第11図67	F18区・Ⅱ層	磨石	8.1	7.6	5.0	400.0	花崗閃緑岩	仙人付近 中生界
32	第11図68	F18区・Ⅱ層	磨石	7.8	6.9	4.8	380.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
33	第11図69	E26区・Ⅰ層	磨石	10.0	8.9	4.4	510.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
34	第11図70	D30区・表採	石錘	5.8	6.0	2.0	80.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
35	第11図71	F18区・Ⅰ層	石錘	4.9	5.9	1.9	80.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
36	第11図72	E26区・Ⅱ層下位	石錘	4.6	5.6	2.2	80.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
37	第12図73	F20区・Ⅱ層	石錘	4.8	6.7	2.2	110.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
38	第12図74	D29区・Ⅰ層	石錘	4.7	5.0	2.1	80.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
39	第12図75	F15区・Ⅲ層	石錘	4.9	5.6	2.0	80.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
40	第12図76	D29区・Ⅰ層	石錘	5.5	(5.9)	2.0	100.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
41	第12図77	E25区・Ⅱ層	石錘	5.5	6.3	2.0	90.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
42	第12図78	F20区・　層	石錘	4.5	5.6	1.4	50.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
43	第12図79	E29区・Ⅲ層	石錘	5.2	6.2	2.0	100.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
44	第12図80	F23区・Ⅰ層	石錘	5.8	6.3	1.7	70.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
45	第12図81	E26区・Ⅱ層	石錘	5.8	(6.3)	1.6	60.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
46	第12図82	D10区・Ⅰ層	石錘	6.0	7.5	1.8	120.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
47	第12図83	E26区・Ⅰ層	石錘	7.8	6.0	2.4	170.0	緑色凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統
48	第12図84	E25区・Ⅱ層	石錘	8.1	9.2	2.5	280.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
49	第12図85	D32区・表採	石錘	6.7	6.4	2.6	140.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
50	第12図86	F18区・Ⅲ層	石皿	32.7	20.0	6.6	500.0	輝石安山岩	奥羽山地 新第三系中新統
51	第12図87	E27区・Ⅲ層	耳飾	4.6	1.6	0.8	12.35	極細粒凝灰岩	奥羽山地 新第三系中新統

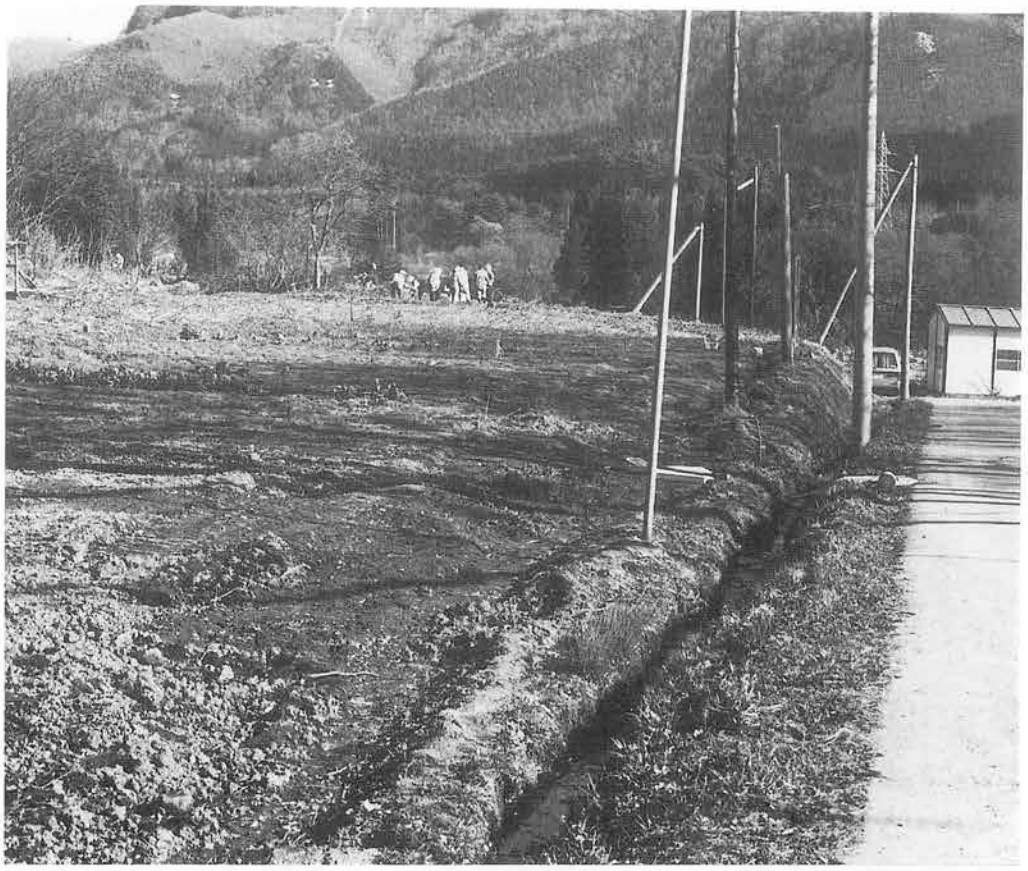
写　真　図　版

調査区全景（空中写真―南西から）

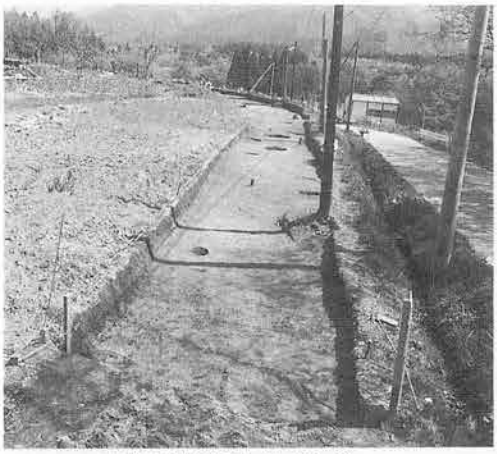


遺構検出状況（空中写真―上方が北）

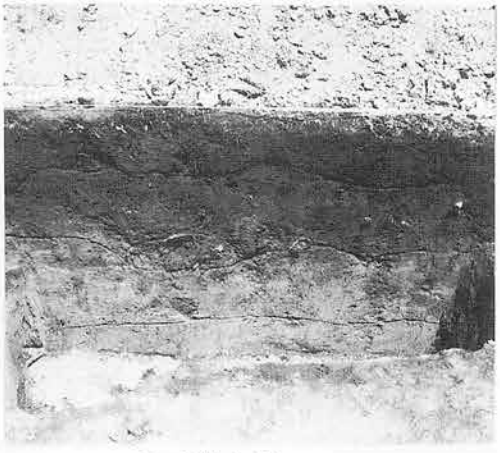
写真図版１　遺跡空中写真



調査区近景（北西から）

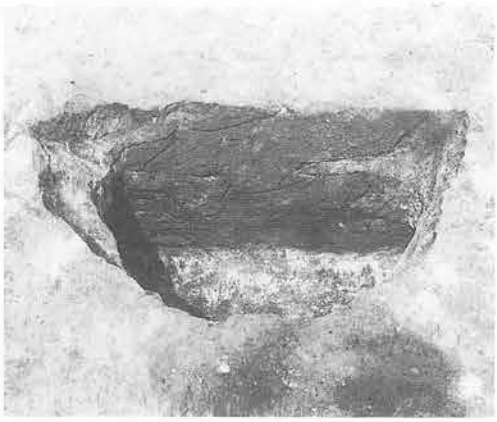


調査区完掘状況（北西から）

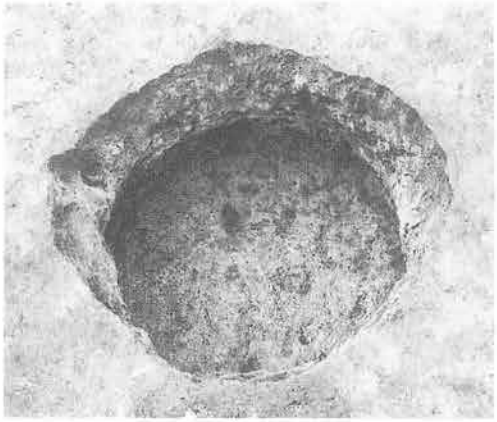


E16区基本土層

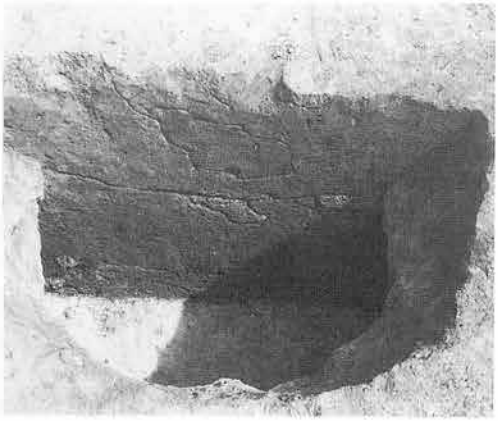
写真図版２　基本土層



D10土坑　断面



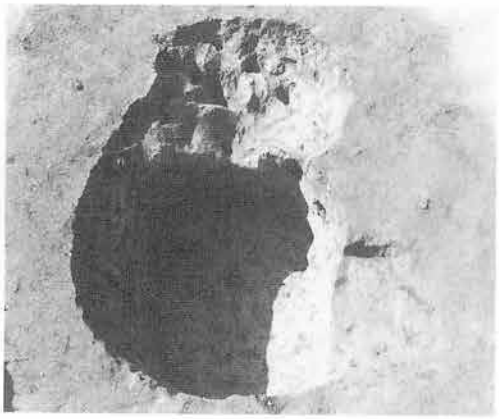
D10土坑　平面



D11土坑　断面

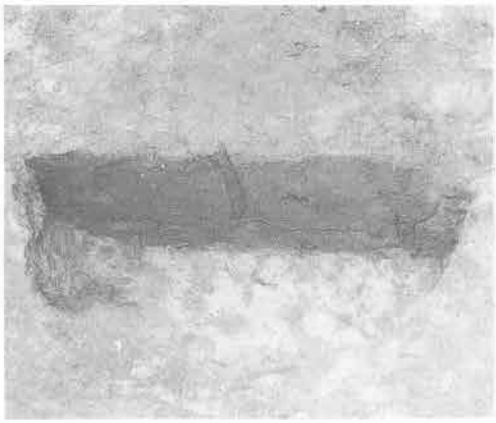
D11土坑　平面

D29－1・2土坑　断面

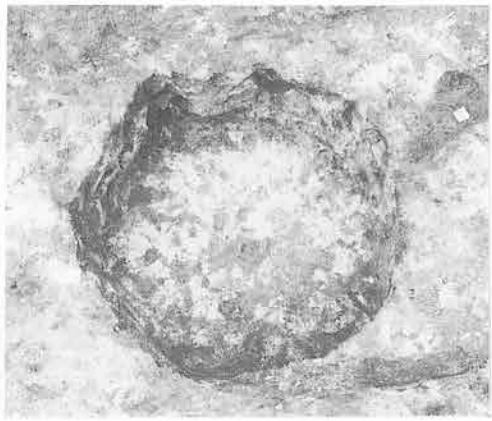


D29－1・2土坑　平面

写真図版3　土坑(1)



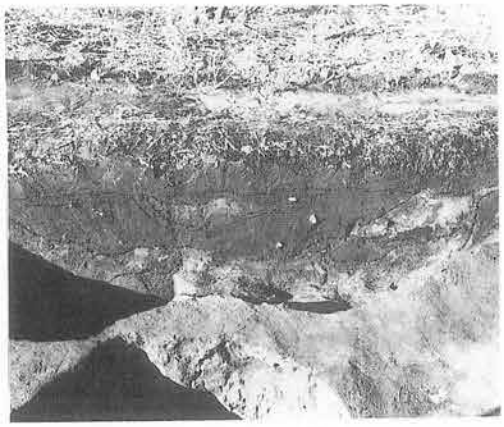
D31－1土坑　断面



D31－1土坑　平面

D31－2土坑　断面

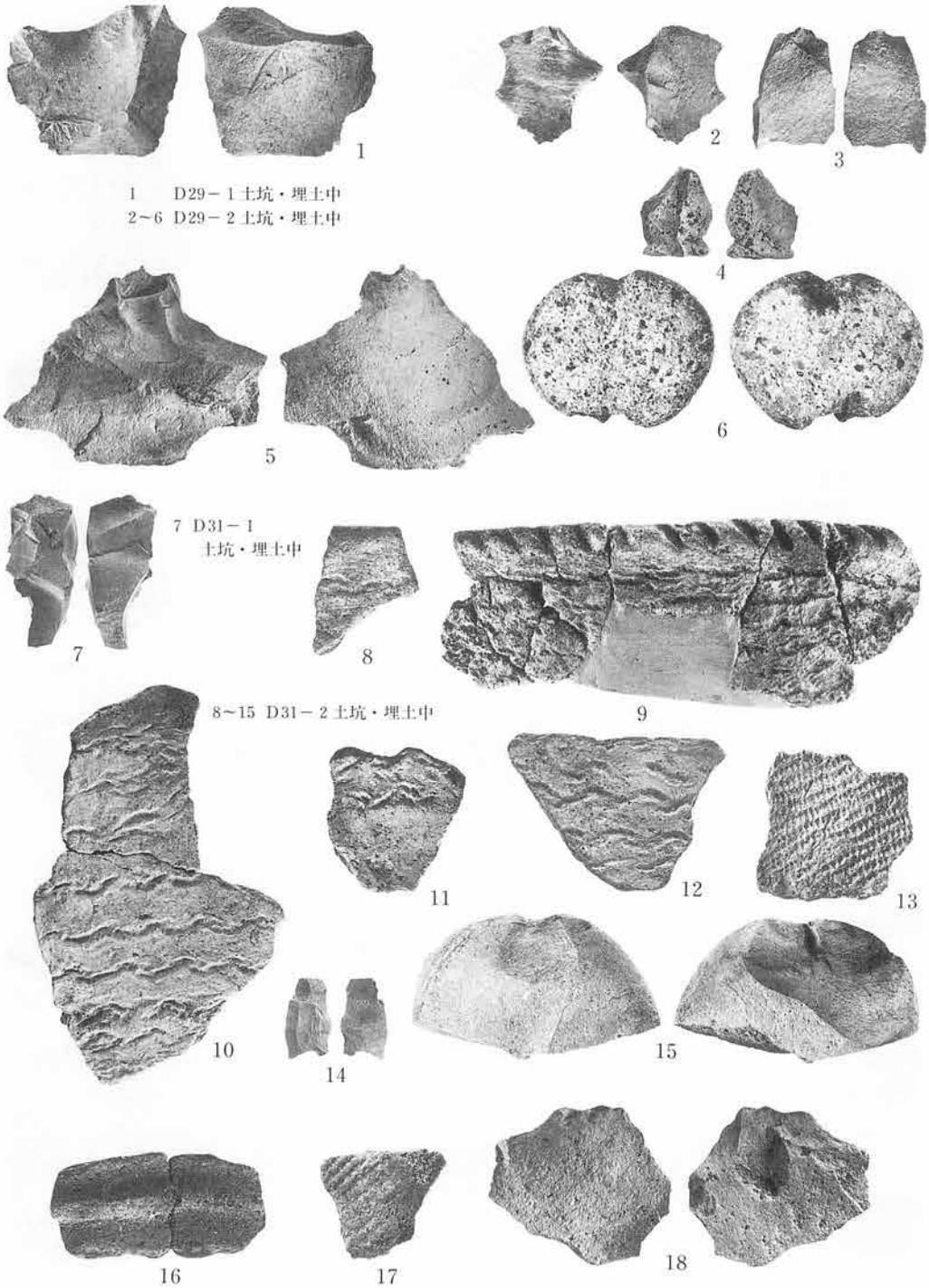
D31－2土坑　平面



C31土坑　断面

C31土坑　平面

写真図版４　土坑(2)



1　D29－1土坑・埋土中
2～6 D29－2土坑・埋土中

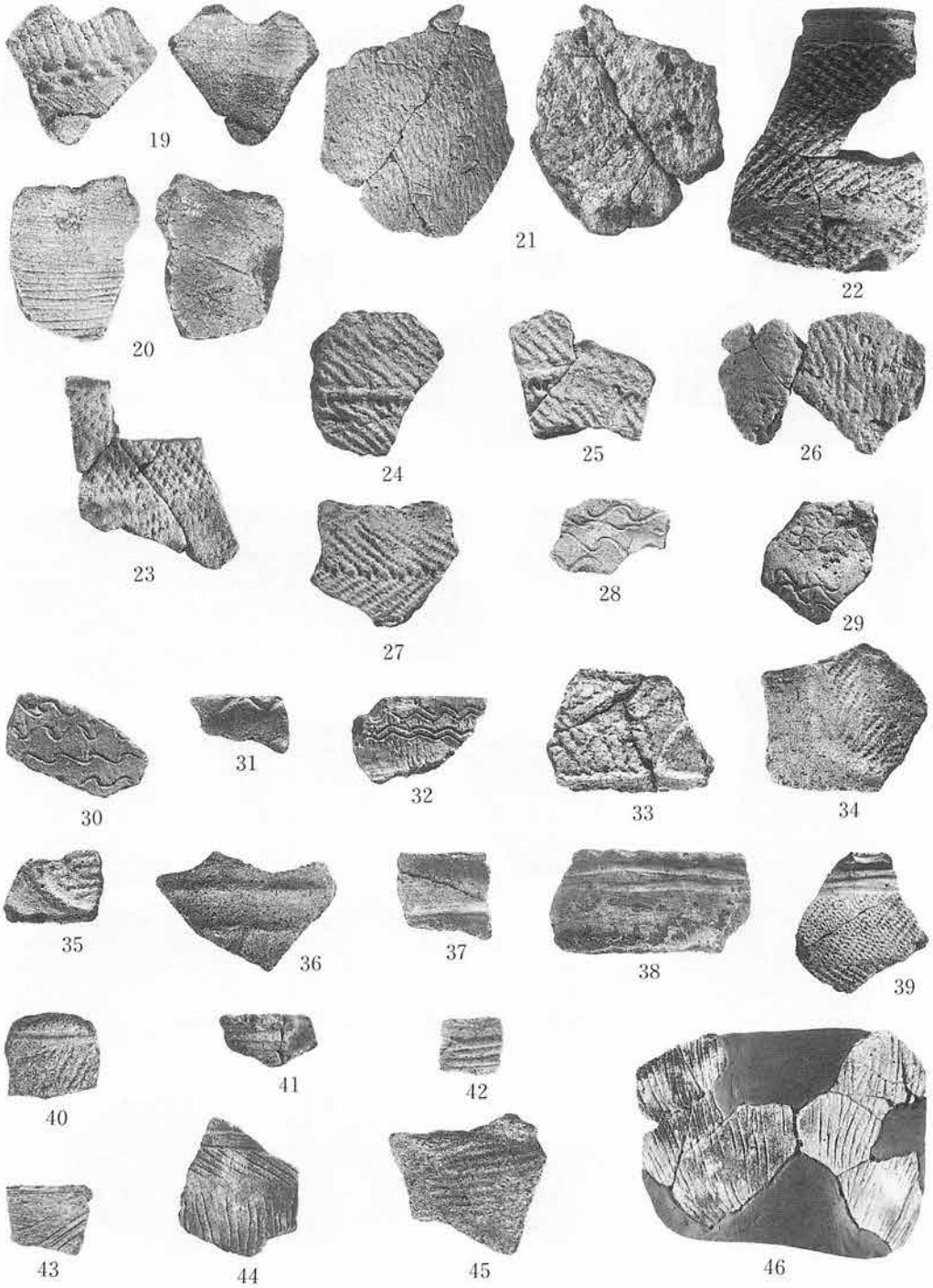
7 D31－1
土坑・埋土中

8～15 D31－2土坑・埋土中

16～18 C31土坑・埋土

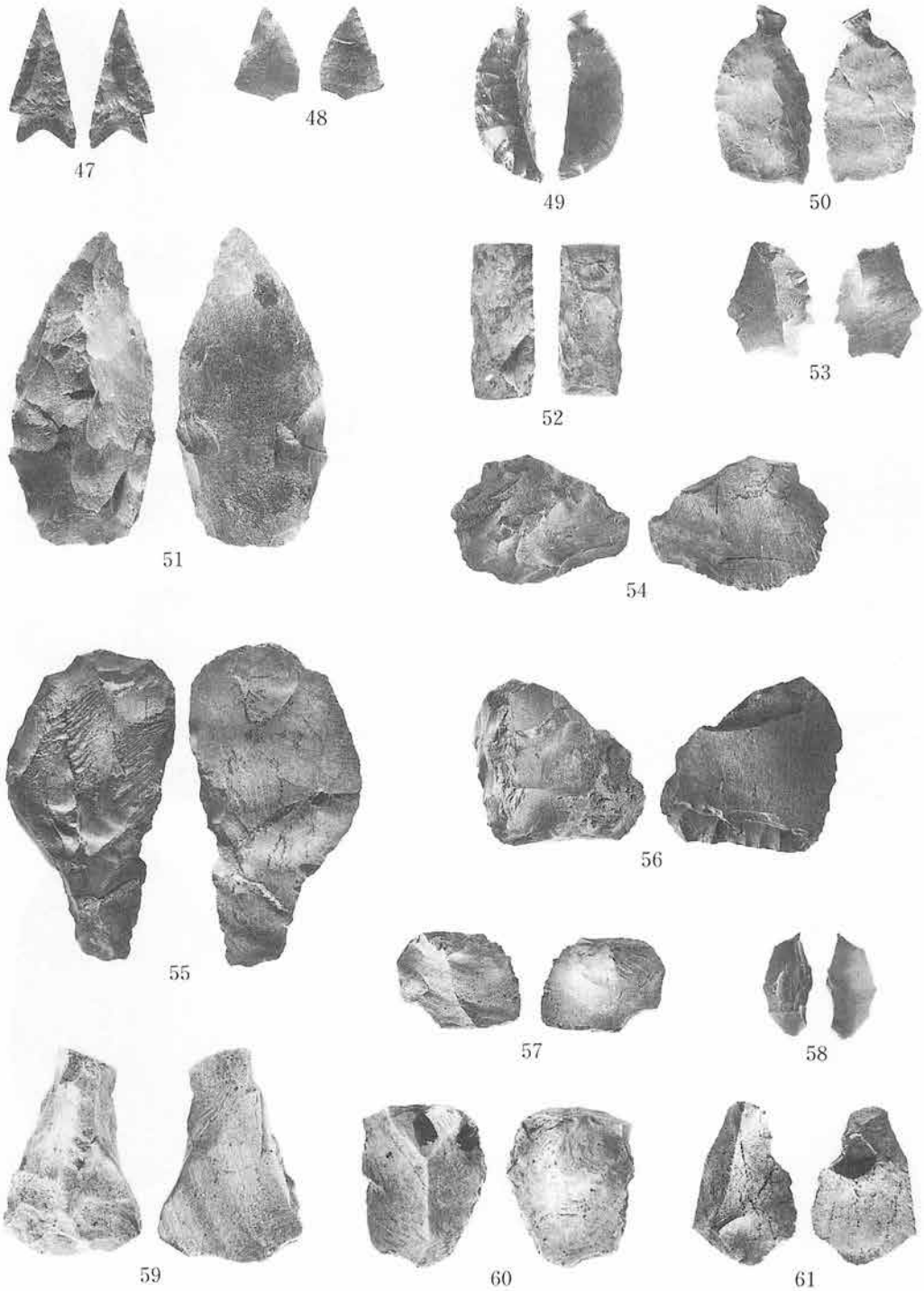
1～18. S＝1/2

写真図版5　土坑内出土遺物



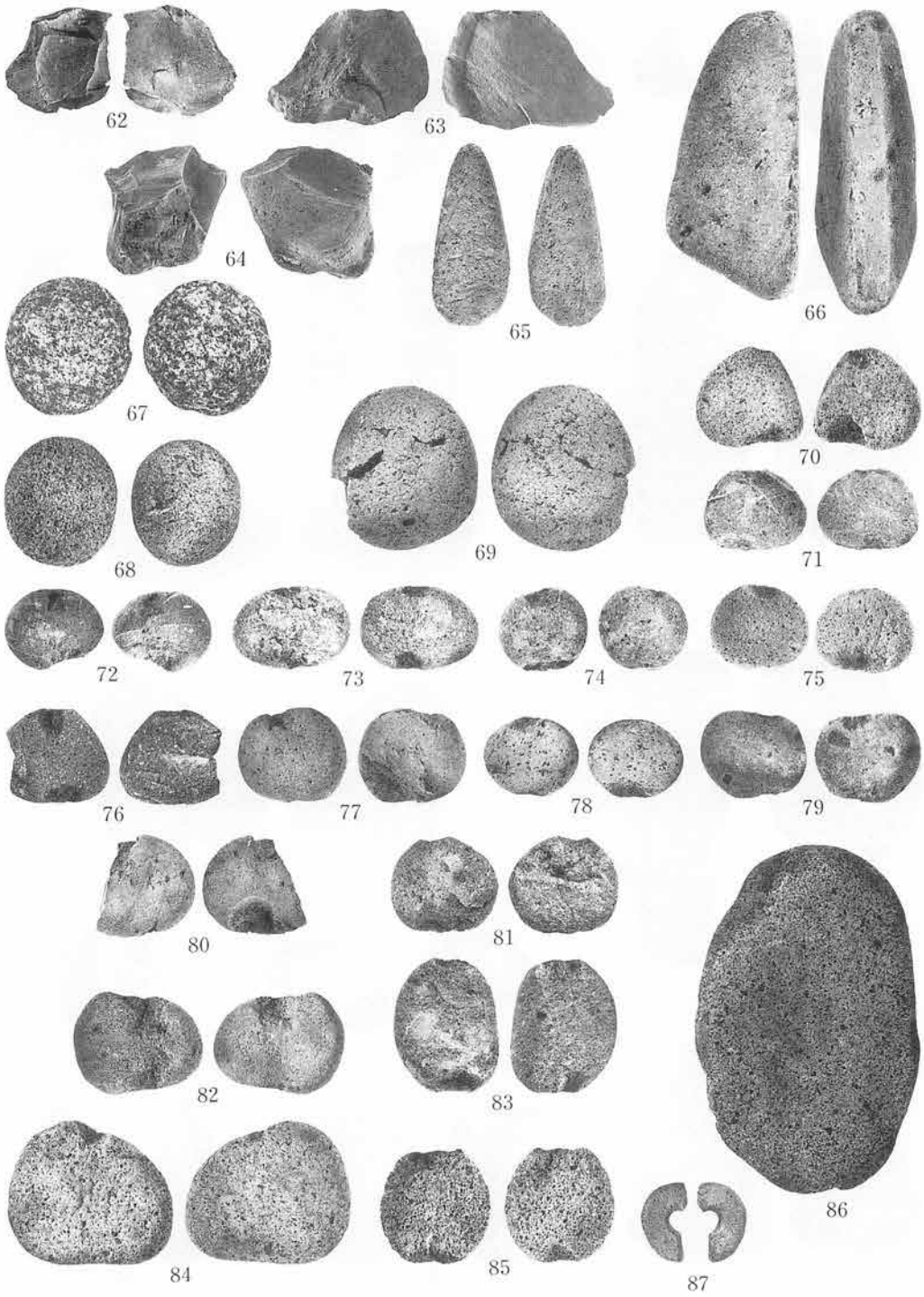
19～45. S＝1/3　46. S＝1/4

写真図版６　遺構外出土土器



47～61．S＝1/2

写真図版７　遺構外出土石器(1)



62～85, 87. S＝1/4　86. S＝3/10

写真図版８　遺構外出土石器(2)

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

理事兼所長	小笠原喜一
副所長	高橋敬明

[管理課]

管理課長（兼）	高橋敬明
課長補佐	森岡陽一
主事	佐藤理

[調査課]

調査課長	村上康昭
課長補佐	鈴木惠治
〃	三浦謙一
主任文化財専門調査員	高橋與右エ門
〃	工藤利幸
〃	中川重紀
〃	藤村敏男
〃	高橋義介
〃	高橋正之
〃	渡辺洋一
〃	佐々木清文
文化財専門調査員	斎藤實
〃	佐藤隆
〃	千葉孝雄
〃	斎藤博司
〃	東海林隆幹
〃	佐々木弘
〃	川村均
〃	鈴木貞行
〃	伊東格
〃	斎藤邦雄
〃	神敏彦
〃	佐々木信一
〃	小原眞一
〃	酒井宗孝

[資料課]

資料課長	村松義夫
文化財専門調査員	高橋一浩
嘱託	根橋文一
〃	吉田十次
運転技士兼事務員	佐藤春男
文化財専門調査員	松本建速
〃	笹平克子
〃	花坂政博
〃	佐々木務
〃	金子昭彦
〃	濱田宏
〃	羽柴直人
〃	星雅之
〃	高木晃
〃	鎌田勉
期限付専門職員	鎌田精造
〃	阿部勝則
〃	千葉悟
〃	熊谷博由
〃	新倉信一郎
〃	山口博英
〃	小山内透
〃	柳田麿
〃	田中元明
〃	菅原敬悦
〃	工藤剛司
〃	高橋英樹
〃	溜浩二郎
〃	佐藤修一

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第193集

人当Ⅰ遺跡発掘調査報告書

北本内ダム建設工事関連遺跡発掘調査

印刷　平成５年３月25日
発行　平成５年３月30日

発　行　(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　岩手県盛岡市下飯岡11－185
ＴＥＬ (0196) 38－9001
印　刷　株式会社　吉　田　印　刷
〒020　岩手県盛岡市名須川町23－27
ＴＥＬ (0196) 25－2323

© 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1993